

(5) 予測結果

ア 搬入道路の新設及び既設道路の改修

ア) 建設工事

実施区域における表層地質は、「別添 3-2 2.3 (2) 地質」(P. 81)に示すとおり、三浦層群逗子層の泥岩・砂岩に区分される。三浦層群逗子層における土質試験によれば、粒度分布の結果は、表 5-2-2-1-26 に示すとおりである。風による輸送が考えられる直径 2.0mm 以下の土粒子の割合は 100%であり、風による土粒子の飛散に伴う粉じんの発生が考えられる。

表 5-2-2-1-26 粒度分布結果

地層名	粒度分布 (%)					最大粒径 (mm)
	石分 (75mm 以上)	礫分 (2~75 mm)	砂分 (0.075~2mm)	シルト分 (0.005~0.075mm)	粘土分 (0.005 mm未満)	
三浦層群・逗子層	—	0.0	2.4	61.8	35.8	0.425

注) 粒度分布結果は、試料番号7-S-1の結果を用いた。

出典：「平成23年度 新ごみ処理施設建設計画に伴う土質調査及び道路予備設計業務 土質調査報告書 (新設道路計画地)」(平成24年、横須賀市資源循環部広域処理施設建設準備室)

ビューフォート風力階級では風力階級4以上(風速5.5m/s以上)になると砂ぼこりが立ち、粉じん等が飛散すると考えられる。実施区域における風速5.5m/s以上になる時間数及び日数は、表5-2-2-1-27に示すとおりである。

風速5.5m/s以上が出現した日数は71日間で出現頻度は19.5%、風速5.5m/s以上になる年間時間数は399時間で出現頻度は4.6%であった。

表5-2-2-1-27 風速5.5m/s以上になる時間数及び日数

年	月	風速5.5m/s以上の時間		風速5.5m/s以上が出現した日数	
		時間数 (時間)	出現頻度 (%)	日数 (日)	出現頻度 (%)
平成24年	5月	21	2.8	5	16.1
	6月	26	3.6	5	16.7
	7月	65	8.7	11	35.5
	8月	16	2.2	5	16.1
	9月	7	1.0	1	3.3
	10月	16	2.2	3	9.7
	11月	24	3.3	6	20.0
	12月	21	2.8	3	9.7
平成25年	1月	38	5.1	7	22.6
	2月	18	2.7	3	10.7
	3月	73	9.8	10	32.3
	4月	74	10.3	12	40.0
合計		399	4.6	71	19.5

注) 実施区域における1年間の地上風速観測結果より算出した。

なお、建設工事に伴う粉じんへの対策として、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事区域の周辺には仮囲いを設置し、掘削、盛土にあたっては、必要に応じ整地、転圧を行う。
- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行う。
- ・ 工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

イ) 建設機械の稼働

a 大気汚染評価物質

工事開始後 10～21 か月目の建設機械の稼働に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表 5-2-2-1-28(1/2)～(2/2)及び図 5-2-2-1-17(1/2)～(2/2)に示すとおりである。

建設機械の稼働に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度（年平均値）は、共に実施区域東側敷地境界で、二酸化窒素濃度が0.003052ppmで寄与率が21.7%、浮遊粒子状物質濃度が0.000184mg/m³で寄与率が0.9%であった。

表5-2-2-1-28(1/2) 建設機械の稼働に伴う二酸化窒素濃度の予測結果（年平均値）

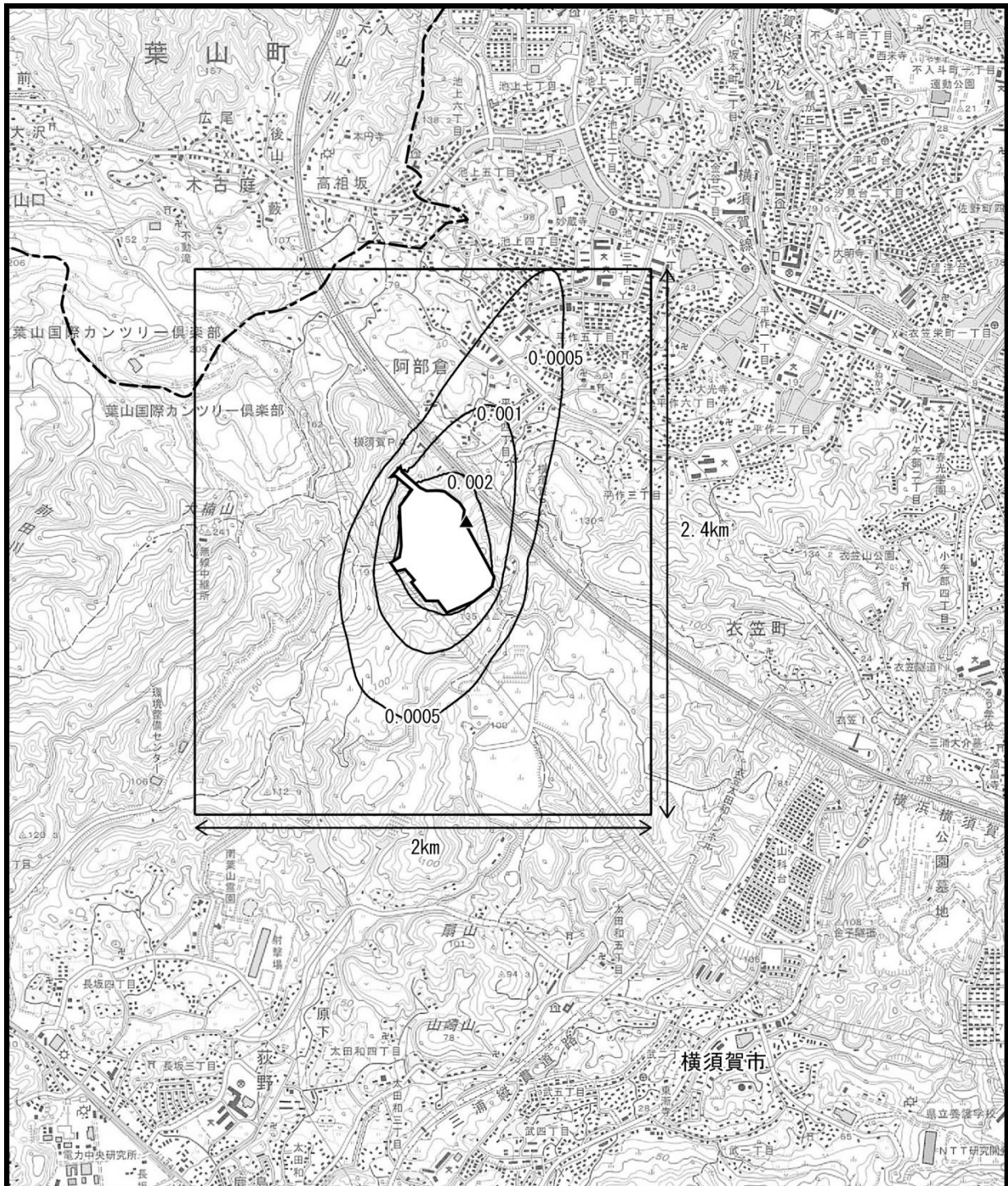
(単位：ppm)

予測地点	建設機械 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
実施区域東側 敷地境界	0.003052	0.011	0.014052	21.7

表5-2-2-1-28(2/2) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果（年平均値）

(単位：mg/m³)

予測地点	建設機械 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
実施区域東側 敷地境界	0.000184	0.021	0.021184	0.9



凡例

(単位：ppm)

- : 実施区域
- : 市町界
- : 最大着地濃度地点

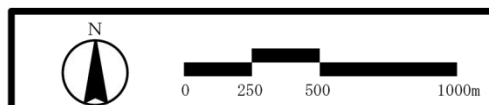
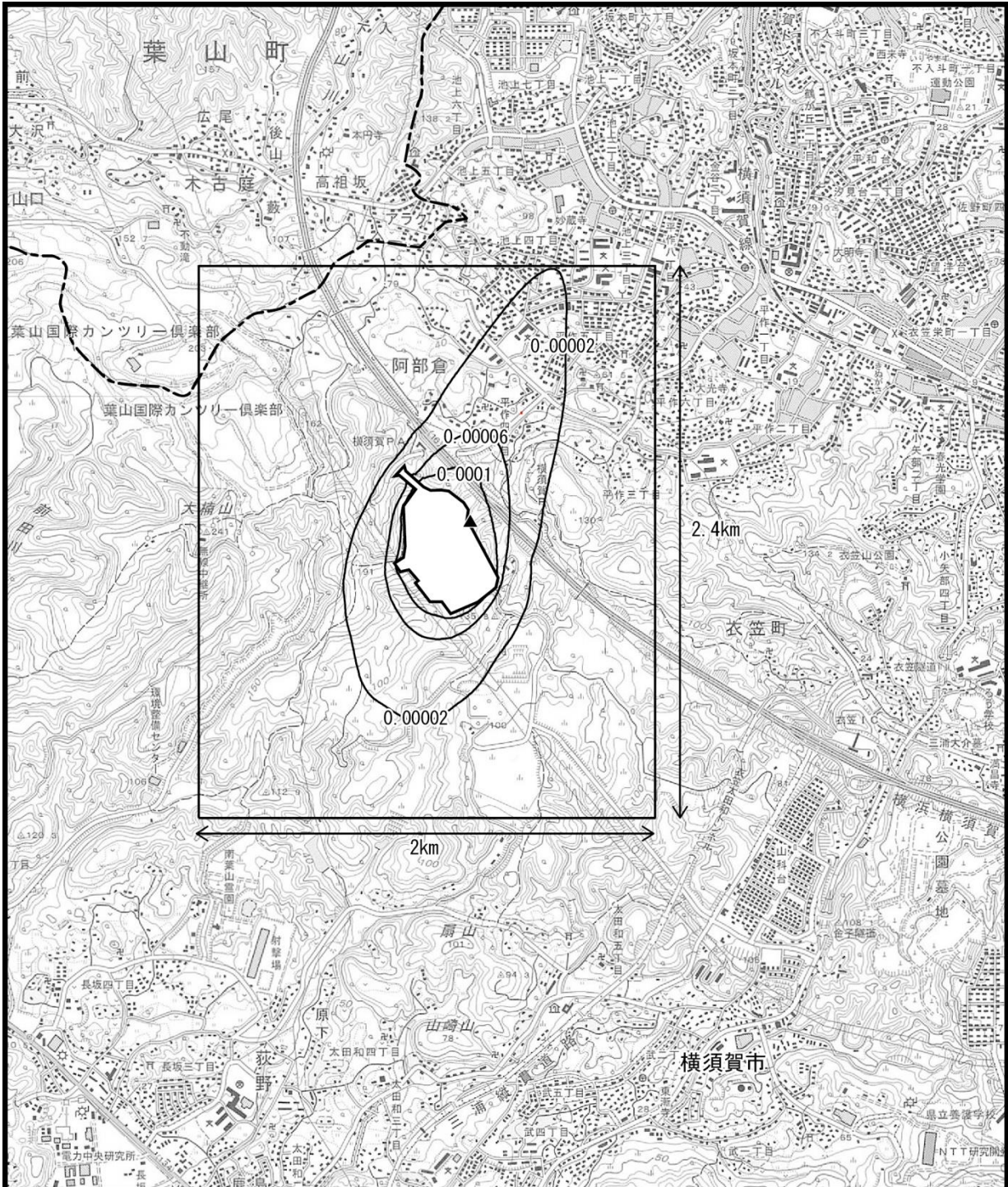


図 5-2-2-1-17(1/2) 建設機械の稼働に伴う
二酸化窒素濃度の予測結果 (年平均値)



凡例

(単位: mg/m^3)

□ : 実施区域

--- : 市町界

▲ : 最大着地濃度地点



図5-2-2-1-17(2/2) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果(年平均値)

b 粉じん

工事開始後 10～21 か月目の建設機械の稼働に伴う粉じんの予測結果は、表 5-2-2-1-29 に示すとおりである。なお、粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行うため、その効果を考慮した。

建設機械の稼働に伴う季節別の降下ばいじん（粉じん）量は、実施区域東側敷地境界で0.4～0.7t/km²/月であった。

表 5-2-2-1-29 建設機械の稼働に伴う粉じんの予測結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん（粉じん）量			
	春季	夏季	秋季	冬季
実施区域東側敷地境界	0.4	0.6	0.6	0.7

ウ) 資材運搬車両等の走行

a 大気汚染評価物質

工事開始後10～21か月目における資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表5-2-2-1-30(1/2)～(2/2)及び図5-2-2-1-18 (1/2)～(2/2)に示すとおりである。

資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度(年平均値)は、平作の南側道路端で、二酸化窒素濃度が0.000007ppmで寄与率が0.0%、浮遊粒子状物質濃度が0.000001mg/m³で寄与率が0.0%であった。大矢部の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000018ppmで寄与率が0.1%、浮遊粒子状物質濃度が0.000003mg/m³で寄与率が0.0%であった。山科台の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000108ppmで寄与率が0.7%、浮遊粒子状物質濃度が0.000016mg/m³で寄与率が0.1%であった。武の西側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000090ppmで寄与率が0.5%、浮遊粒子状物質濃度が0.000018mg/m³で寄与率が0.1%であった。芦名の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000063ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000012mg/m³で寄与率が0.1%であった。

表5-2-2-1-30(1/2) 資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素濃度の予測結果（年平均値）

(単位：ppm)

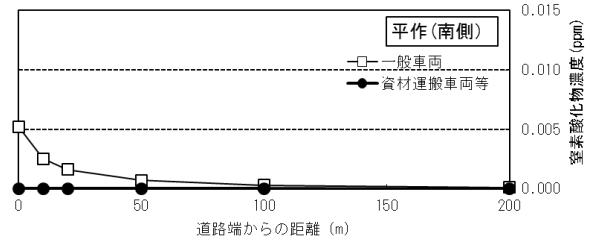
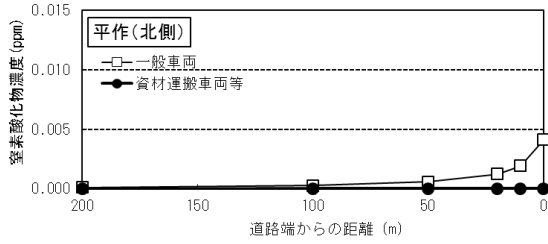
予測地点	資材運搬 車両等 寄与濃度 (NO _x) (A)	一般車両 寄与濃度 (NO _x) (B)	バックグラ ウンド 濃度 (NO _x) (C)	環境濃度 予測結果 (NO _x) (D=A+B+C)	環境濃度 予測結果 (NO ₂) (E=Dの 変換)	バックグラ ウンド 濃度 (NO ₂) (F=B+Cの 変換)	資材運搬 車両等 の影響 (NO ₂) (G=E-F)	寄与率 (%) (G/E)
平作 南側道路端	0.000017	0.005232	0.014	0.019250	0.015870	0.015863	0.000007	0.0
大矢部 北側道路端	0.000047	0.009241	0.014	0.023289	0.017494	0.017476	0.000018	0.1
山科台 北側道路端	0.000235	0.001869	0.014	0.016104	0.014486	0.014377	0.000108	0.7
武 西側道路端	0.000259	0.014333	0.014	0.028591	0.019429	0.019339	0.000090	0.5
芦名 北側道路端	0.000175	0.012643	0.014	0.026819	0.018804	0.018740	0.000063	0.3

表 5-2-2-1-30 (2/2) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果(年平均値)

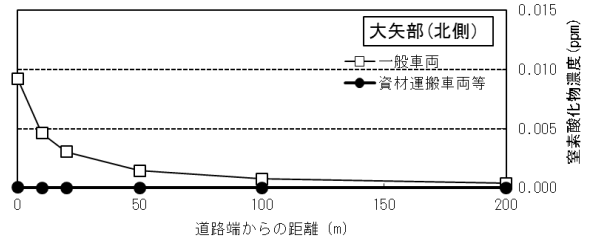
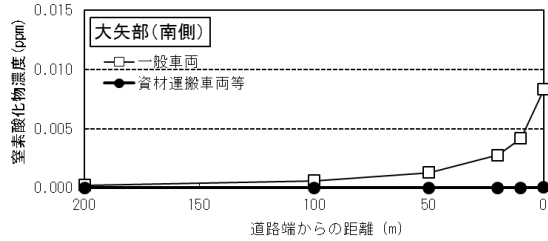
(単位：mg/m³)

予測地点	資材運搬 車両等 寄与濃度 (A)	一般車両 寄与濃度 (B)	バックグラ ウンド濃度 (C)	環境濃度 予測結果 (A+B+C)	寄与率 (%) (A/(A+B+C))
平作 南側道路端	0.000001	0.000338	0.021	0.021339	0.0
大矢部 北側道路端	0.000003	0.000602	0.021	0.021605	0.0
山科台 北側道路端	0.000016	0.000120	0.021	0.021137	0.1
武 西側道路端	0.000018	0.000926	0.021	0.021944	0.1
芦名 北側道路端	0.000012	0.000824	0.021	0.021837	0.1

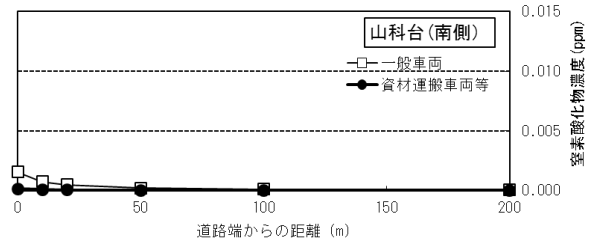
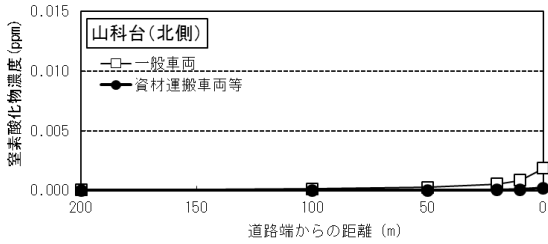
< 平作 >



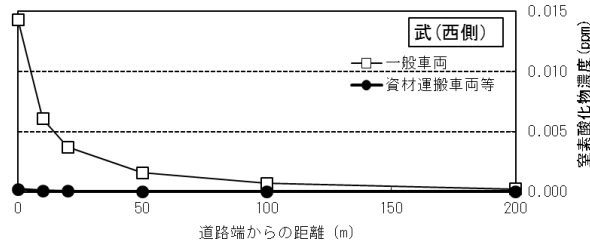
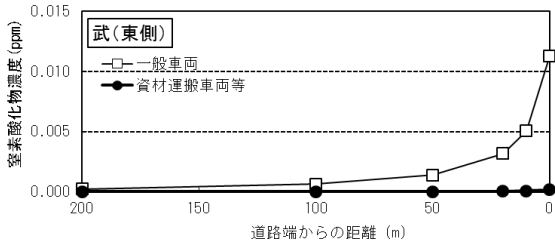
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

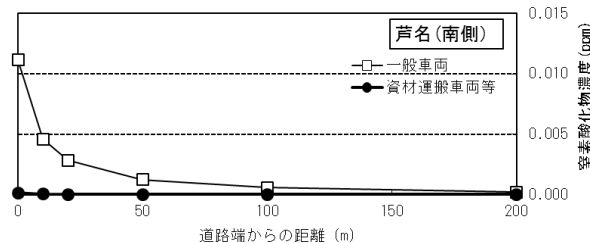
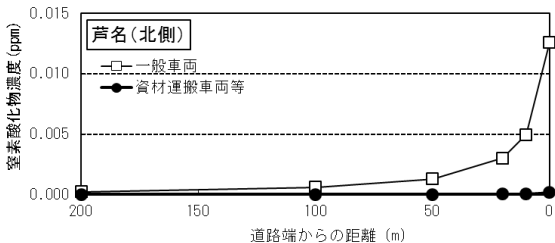
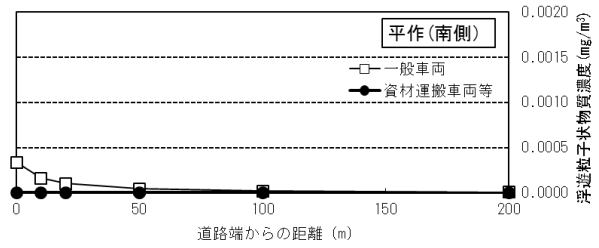
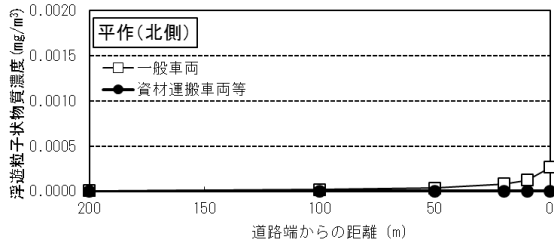
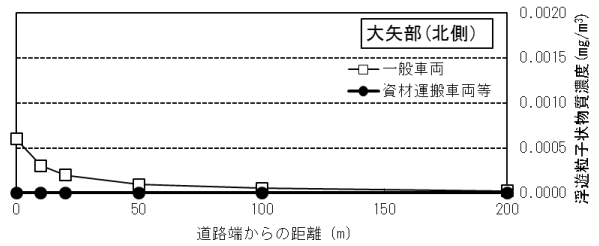
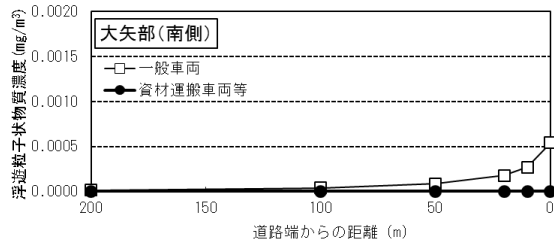


図5-2-2-1-18 (1/2) 資材運搬車両等の走行に伴う窒素酸化物濃度の予測結果 (年平均値)

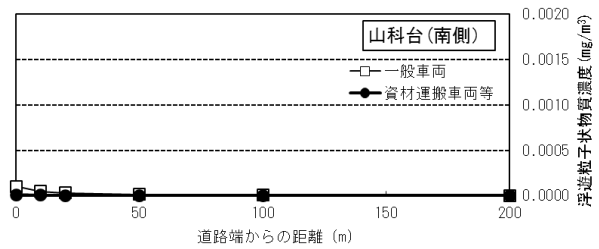
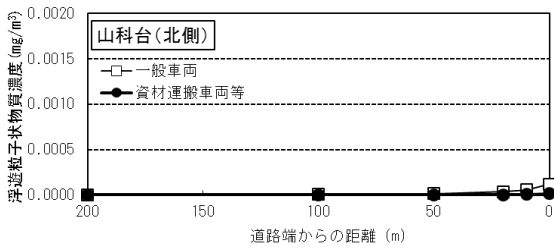
< 平作 >



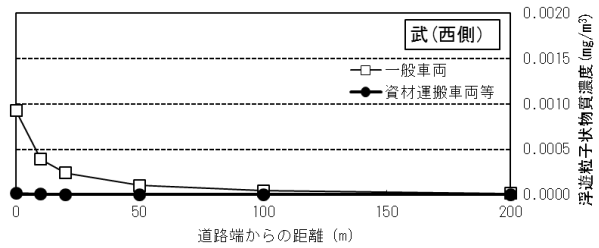
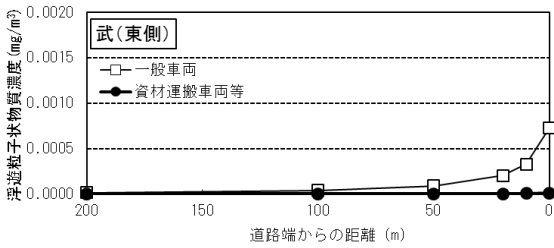
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

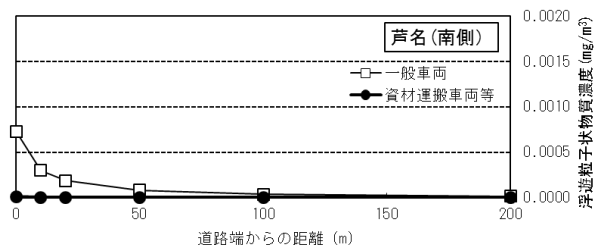
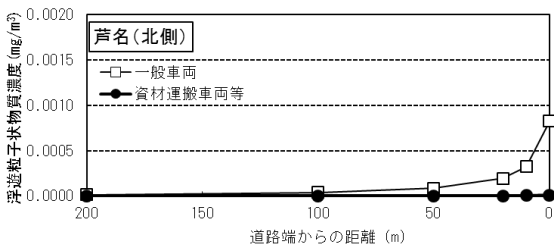


図5-2-2-1-18(2/2) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果(年平均値)

b 粉じん

工事開始後 10～21 か月目の資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの予測結果は、表 5-2-2-1-31 に示すとおりである。

資材運搬車両等の走行に伴う季節別の降下ばいじん（粉じん）量は、平作の南側道路端で0.1t/km²/月未満、大矢部の北側道路端で0.1t/km²/月未満、山科台の北側道路端で0.1t/km²/月未満～0.1t/km²/月、武の西側道路端で0.1t/km²/月、芦名の北側道路端で0.1t/km²/月であった。

表 5-2-2-1-31 資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの予測結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん（粉じん）量			
	春季	夏季	秋季	冬季
平作 南側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
大矢部 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
山科台 北側道路端	0.1	<0.1	0.1	0.1
武 西側道路端	0.1	0.1	0.1	0.1
芦名 北側道路端	0.1	0.1	0.1	0.1

注)「<」は0.1t/km²/月未満であることを示す。

イ 工事の実施

ア) 建設工事

実施区域における表層地質は、「別添 3-2 2.3 (2) 地質」(P. 81)に示すとおり、三浦層群逗子層の泥岩・砂岩に区分される。三浦層群逗子層における土質試験によれば、粒度分布の結果は「搬入道路の新設及び既設道路の改修」の「建設工事」に示すとおりである。風による輸送が考えられる直径 2.0mm 以下の土粒子の割合は 100% であり、風による土粒子の飛散に伴う粉じんの発生が考えられる。

ビューフォート風力階級で風力階級 4 以上（風速 5.5m/s 以上）になると砂ぼこりが立ち、粉じん等が飛散すると考えられる。風速 5.5m/s 以上になる時間数及び日数は、「搬入道路の新設及び既設道路の改修」の「建設工事」に示すとおりである。

風速 5.5m/s 以上が出現した日数は 71 日間で出現頻度は 19.5%、風速 5.5m/s 以上になる年間時間数は 399 時間で出現頻度は 4.6% であった。

なお、建設工事に伴う粉じんへの対策として、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事区域の周辺には仮囲いを設置し、掘削、盛土にあたっては、必要に応じ整地、転圧を行う。

- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時には、適宜散水を行う。
- ・ 工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

イ) 建設機械の稼働

a 大気汚染評価物質

工事開始後 29～40 か月目の建設機械の稼働に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表 5-2-2-1-32 (1/2)～(2/2)及び図 5-2-2-1-19 (1/2)～(2/2)に示すとおりである。

建設機械の稼働に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度（年平均値）は、実施区域東側敷地境界で、二酸化窒素濃度が0.006281ppmで寄与率が36.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000468mg/m³で寄与率が2.2%であった。

表5-2-2-1-32 (1/2) 建設機械の稼働に伴う二酸化窒素濃度の予測結果（年平均値）

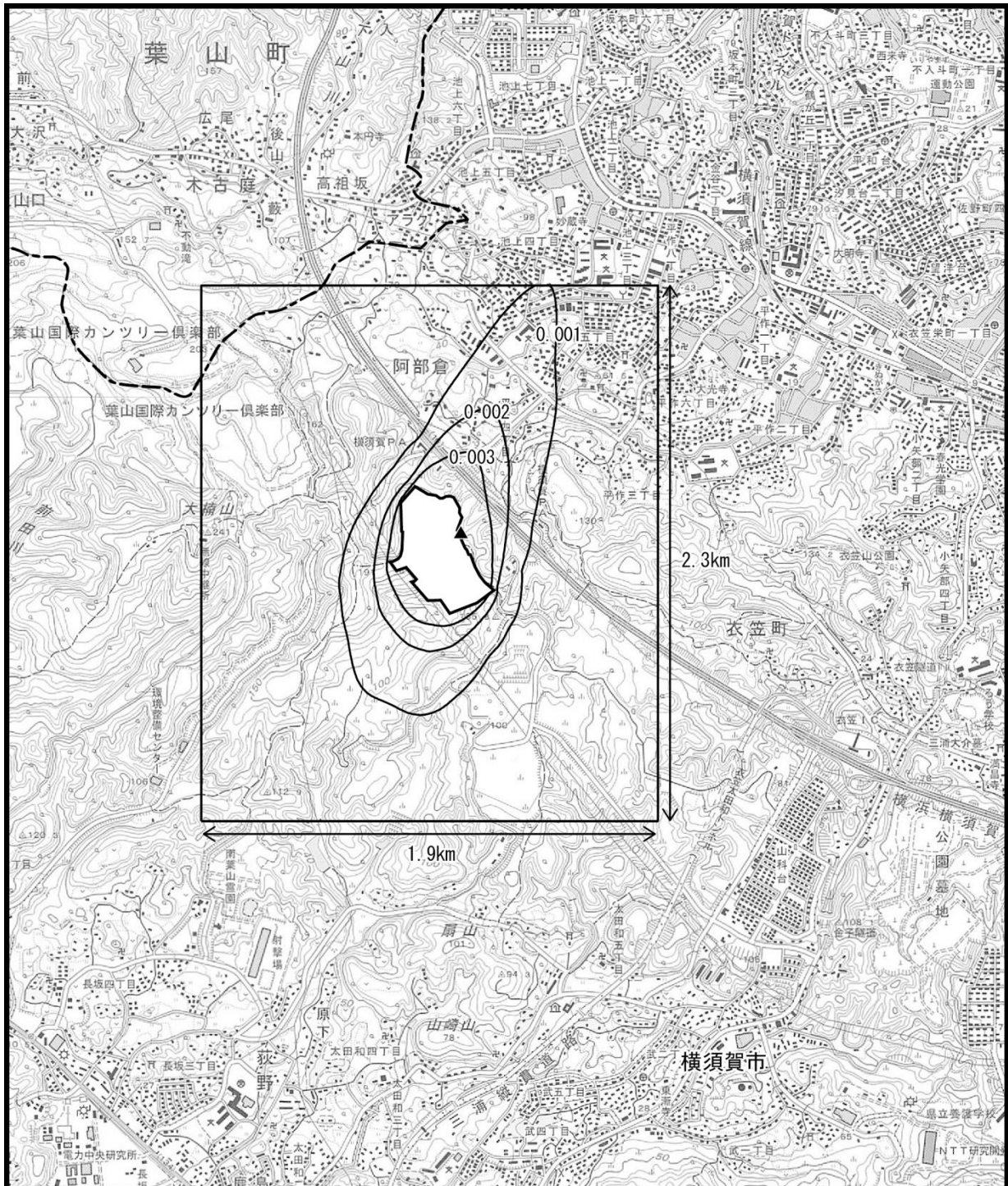
(単位：ppm)

予測地点	建設機械 寄与濃度 (A)	バックグラ ウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
実施区域東側 敷地境界	0.006281	0.011	0.017281	36.3

表 5-2-2-1-32 (2/2) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果（年平均値）

(単位：mg/m³)

予測地点	建設機械 寄与濃度 (A)	バックグラ ウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
実施区域東側 敷地境界	0.000468	0.021	0.021468	2.2



凡例

(単位：ppm)

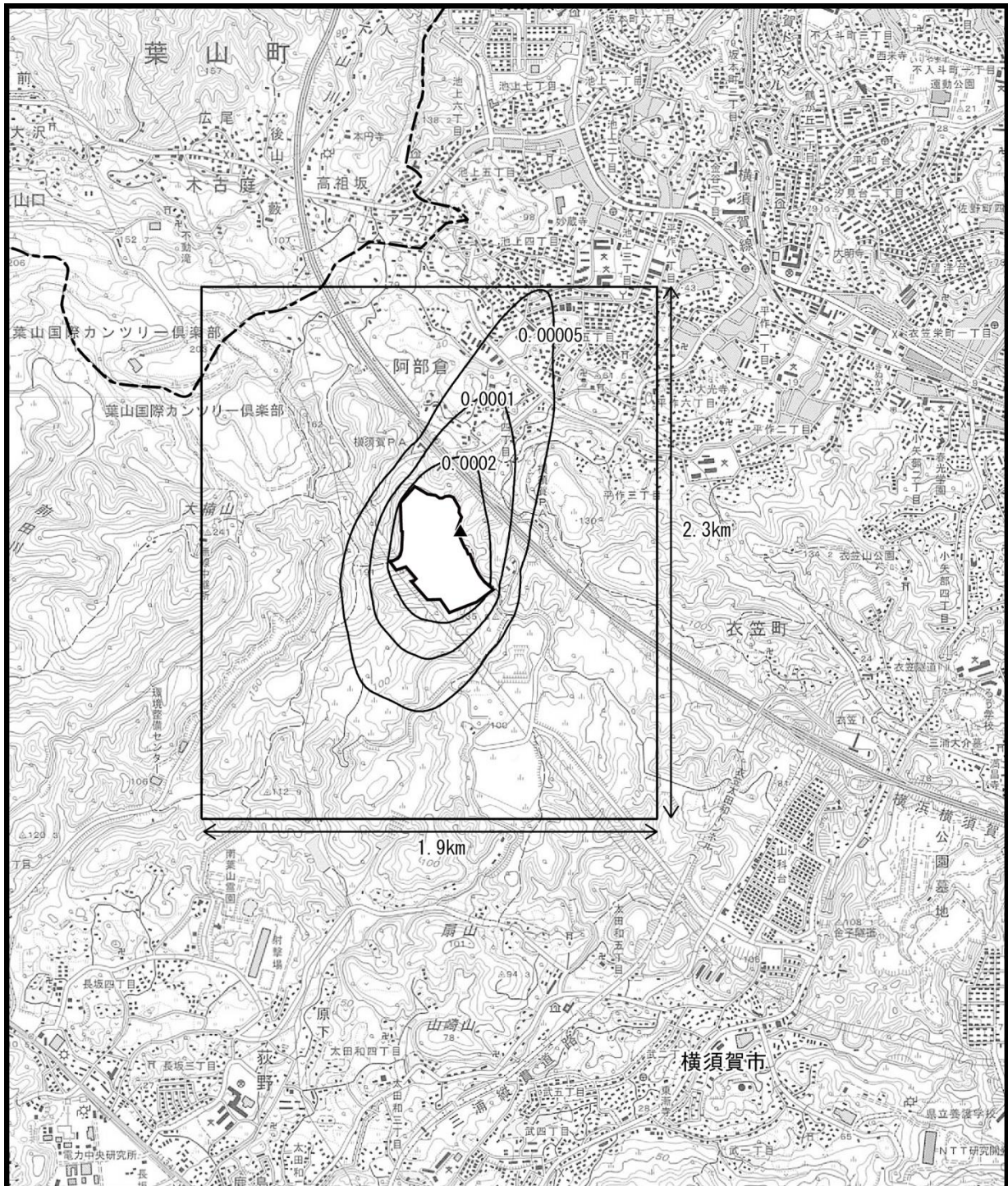
□ : 実施区域

--- : 市町界

▲ : 最大着地濃度地点



図 5-2-2-1-19(1/2) 建設機械の稼働に伴う
二酸化窒素濃度の予測結果 (年平均値)



凡例

(単位：mg/m³)

□ : 実施区域

--- : 市町界

▲ : 最大着地濃度地点



図 5-2-2-1-19 (2/2) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果 (年平均値)

b 粉じん

工事開始後 29～40 か月目の建設機械の稼働に伴う粉じんの予測結果は、表 5-2-2-1-33 に示すとおりである。なお、粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行うため、その効果を考慮した。

建設機械の稼働に伴う季節別の降下ばいじん（粉じん）量は、実施区域東側敷地境界で0.7～1.2t/km²/月であった。

表 5-2-2-1-33 建設機械の稼働に伴う粉じんの予測結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん（粉じん）量			
	春季	夏季	秋季	冬季
実施区域東側敷地境界	0.7	0.7	1.2	1.2

ウ) 資材運搬車両等の走行

a 大気汚染評価物質

平作について工事開始後29～40か月目、大矢部について工事開始後30～41か月目、山科台、武及び芦名について44～55か月目における資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表 5-2-2-1-34(1/2)～(2/2)及び図 5-2-2-1-20(1/2)～(2/2)に示すとおりである。

資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度(年平均値)は、平作の南側道路端で、二酸化窒素濃度が0.000048ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000008mg/m³で寄与率が0.0%であった。大矢部の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000047ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000008mg/m³で寄与率が0.0%であった。山科台の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000022ppmで寄与率が0.2%、浮遊粒子状物質濃度が0.000003mg/m³で寄与率が0.0%であった。武の西側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000022ppmで寄与率が0.1%、浮遊粒子状物質濃度が0.000004mg/m³で寄与率が0.0%であった。芦名の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000001ppmで寄与率が0.0%、浮遊粒子状物質濃度が0.000001mg/m³未満で寄与率が0.0%であった。

表5-2-2-1-34(1/2) 資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素濃度の予測結果（年平均値）

（単位：ppm）

予測地点	資材運搬 車両等 寄与濃度 (NO _x) (A)	一般車両 寄与濃度 (NO _x) (B)	バックグ ラウンド 濃度 (NO _x) (C)	環境濃度 予測結果 (NO _x) (D=A+B+C)	環境濃度 予測結果 (NO ₂) (E=Dの 変換)	バックグ ラウンド 濃度 (NO ₂) (F=B+Cの 変換)	資材運搬 車両等 の影響 (NO ₂) (G=E-F)	寄与率 (%) (G/E)
平作 南側道路端	0.000114	0.005232	0.014	0.019346	0.015911	0.015863	0.000048	0.3
大矢部 北側道路端	0.000122	0.009241	0.014	0.023363	0.017523	0.017476	0.000047	0.3
山科台 北側道路端	0.000047	0.001869	0.014	0.015916	0.014399	0.014377	0.000022	0.2
武 西側道路端	0.000064	0.014333	0.014	0.028396	0.019361	0.019339	0.000022	0.1
芦名 北側道路端	0.000002	0.010976	0.014	0.024979	0.018132	0.018131	0.000001	0.0

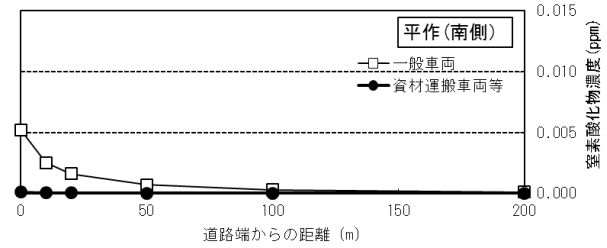
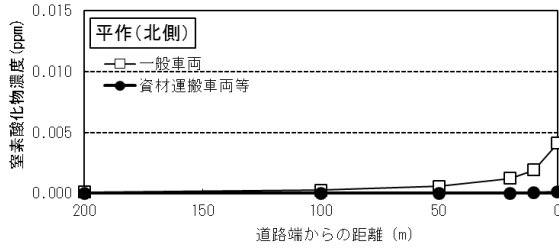
表5-2-2-1-34(2/2) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果（年平均値）

（単位：mg/m³）

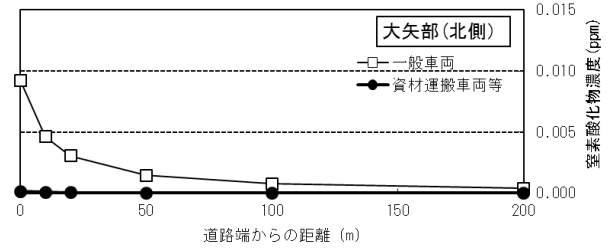
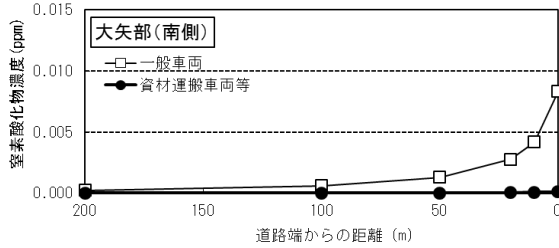
予測地点	資材運搬 車両等 寄与濃度 (A)	一般車両 寄与濃度 (B)	バック グラウンド濃度 (C)	環境濃度 予測結果 (A+B+C)	寄与率 (%) (A/(A+B+C))
平作 南側道路端	0.000008	0.000338	0.021	0.021346	0.0
大矢部 北側道路端	0.000008	0.000602	0.021	0.021610	0.0
山科台 北側道路端	0.000003	0.000120	0.021	0.021123	0.0
武 西側道路端	0.000004	0.000926	0.021	0.021931	0.0
芦名 北側道路端	<0.000001	0.000716	0.021	0.021716	0.0

注)「<」は0.000001mg/m³未満であることを示す。

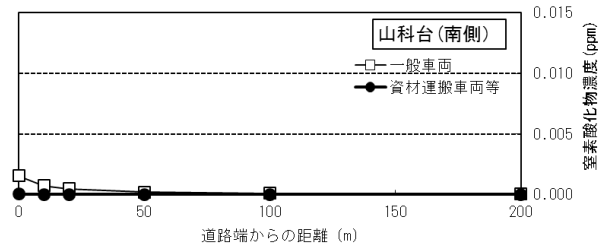
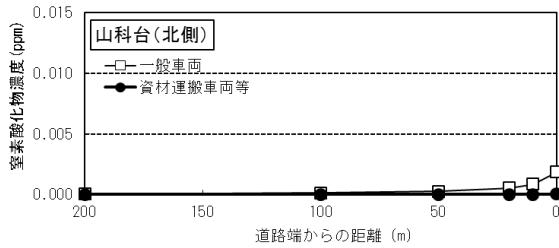
< 平作 >



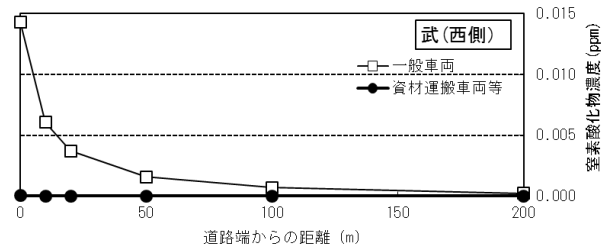
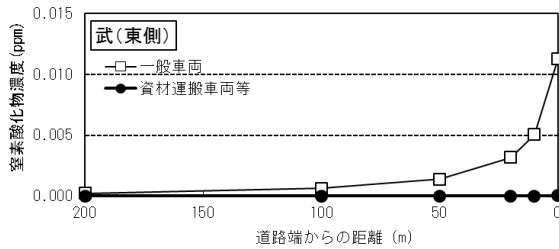
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

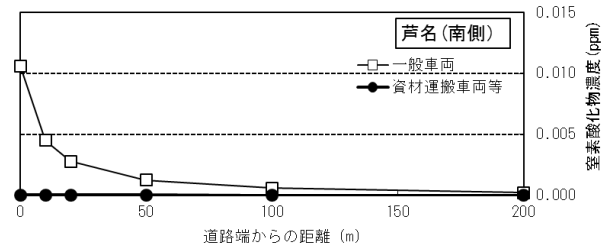
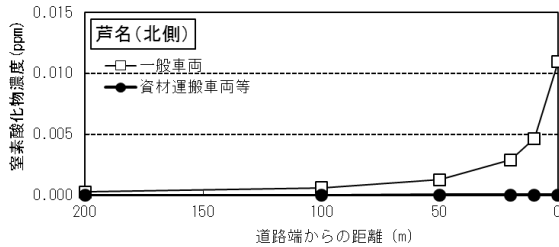
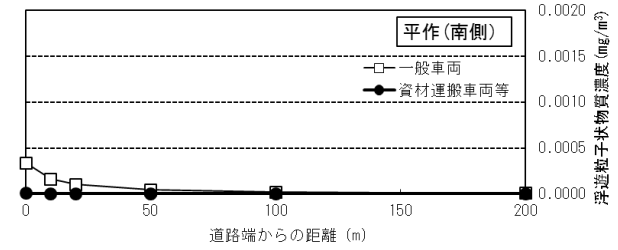
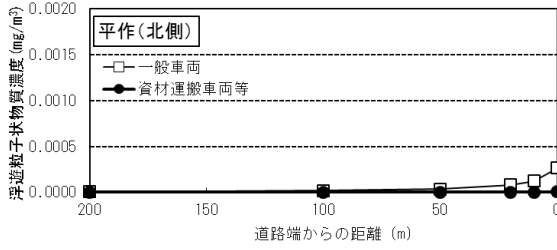
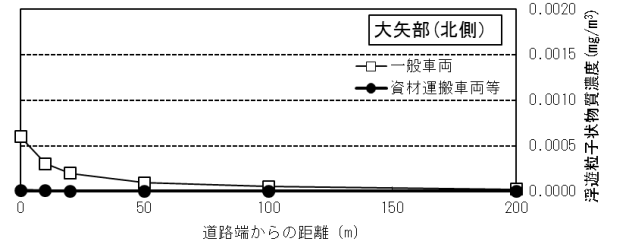
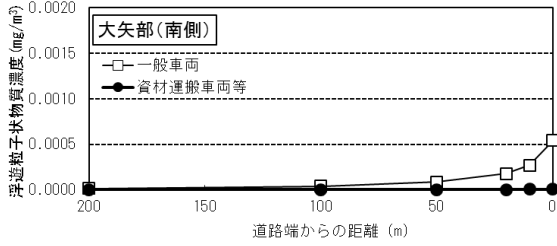


図5-2-2-1-20(1/2) 資材運搬車両等の走行に伴う窒素酸化物濃度の予測結果 (年平均値)

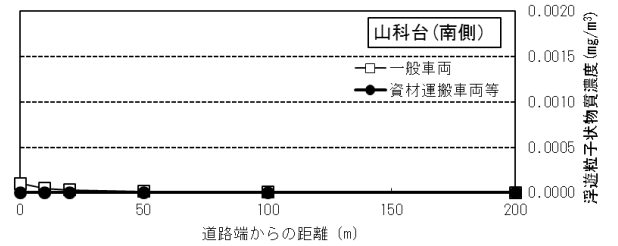
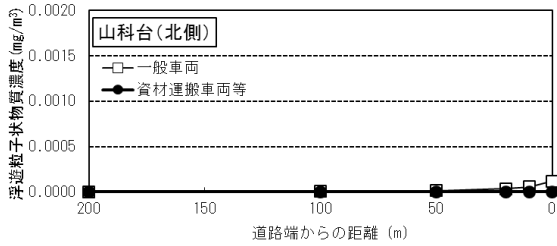
< 平作 >



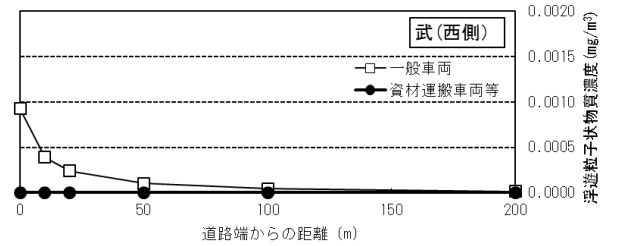
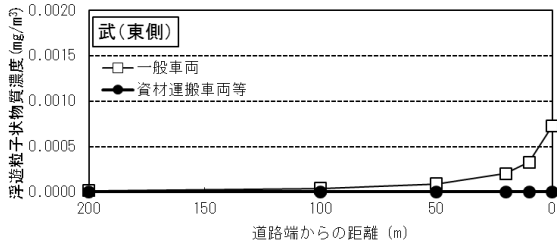
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

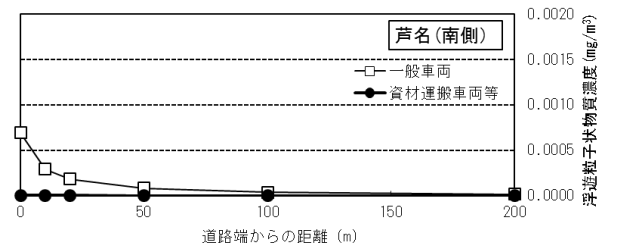
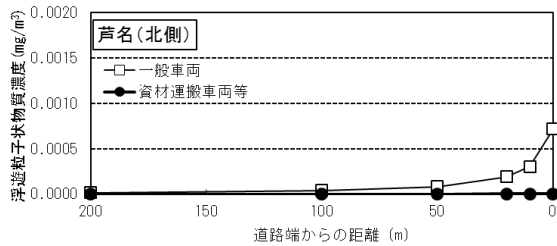


図5-2-2-1-20(2/2) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果(年平均値)

b 粉じん

平作について工事開始後 29～40 か月目、大矢部について工事開始後 30～41 か月目、山科台、武及び芦名については 44～55 か月目における資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの予測結果は、表 5-2-2-1-35 に示すとおりである。

資材運搬車両等の走行に伴う季節別の降下ばいじん(粉じん)量は、平作、大矢部、山科台及び武の道路端で0.1t/km²/月未満であった。芦名においては大型車の通行がないため粉じんの影響は無視できるものと考えられる。

表 5-2-2-1-35 資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの予測結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん(粉じん)量			
	春季	夏季	秋季	冬季
平作 南側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
大矢部 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
山科台 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
武 西側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1
芦名 北側道路端	0	0	0	0

注) 1. 「<」は0.1t/km²/月未満であることを示す。

2. 「0」は粉じんの影響が無視できるものであることを示す。

ウ 土地又は工作物の存在及び供用

ア) 廃棄物処理施設の稼働

a 長期平均濃度

煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及びダイオキシン類濃度は、表 5-2-2-1-36(1/4)～(4/4)及び図 5-2-2-1-21(1/4)～(4/4)に示すとおりである。

煙突排ガスによる最大着地濃度(年平均値)は、二酸化硫黄が実施区域の南南西側約 1,900m において 0.000016ppm で寄与率が 1.6%、二酸化窒素が実施区域の南南西側約 2,900m において 0.000010ppm で寄与率が 0.1%、浮遊粒子状物質が実施区域の南南西側約 1,900m において 0.000009mg/m³ で寄与率が 0.0%、ダイオキシン類が実施区域の南南西側約 1,900m において 0.000009pg-TEQ/m³ で寄与率が 0.0%であった。

表5-2-2-1-36(1/4) 煙突排ガスによる二酸化硫黄濃度の環境濃度予測結果(長期平均濃度)

(単位: ppm)

予測地点	煙突排ガス 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000004	0.001	0.001004	0.4
荻野小学校	0.000014	0.001	0.001014	1.4
西行政センター	0.000012	0.001	0.001012	1.2
大楠小学校	0.000007	0.001	0.001007	0.7
池上市民プラザ	0.000007	0.001	0.001007	0.7
最大着地濃度地点	0.000016	0.001	0.001016	1.6

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。

表5-2-2-1-36(2/4) 煙突排ガスによる二酸化窒素濃度の環境濃度予測結果(長期平均濃度)

(単位: ppm)

予測地点	煙突排ガス 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000003	0.012	0.012003	0.0
荻野小学校	0.000010	0.012	0.012010	0.1
西行政センター	0.000009	0.013	0.013009	0.1
大楠小学校	0.000005	0.013	0.013005	0.0
池上市民プラザ	0.000006	0.015	0.015006	0.0
最大着地濃度地点	0.000010	0.013	0.013010	0.1

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約2,900mの地点である。

表5-2-2-1-36(3/4) 煙突排ガスによる浮遊粒子状物質濃度の環境濃度予測結果(長期平均濃度)

(単位: mg/m³)

予測地点	煙突排ガス 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000002	0.019	0.019002	0.0
荻野小学校	0.000008	0.019	0.019008	0.0
西行政センター	0.000007	0.021	0.021007	0.0
大楠小学校	0.000004	0.020	0.020004	0.0
池上市民プラザ	0.000006	0.020	0.020006	0.0
最大着地濃度地点	0.000009	0.020	0.020009	0.0

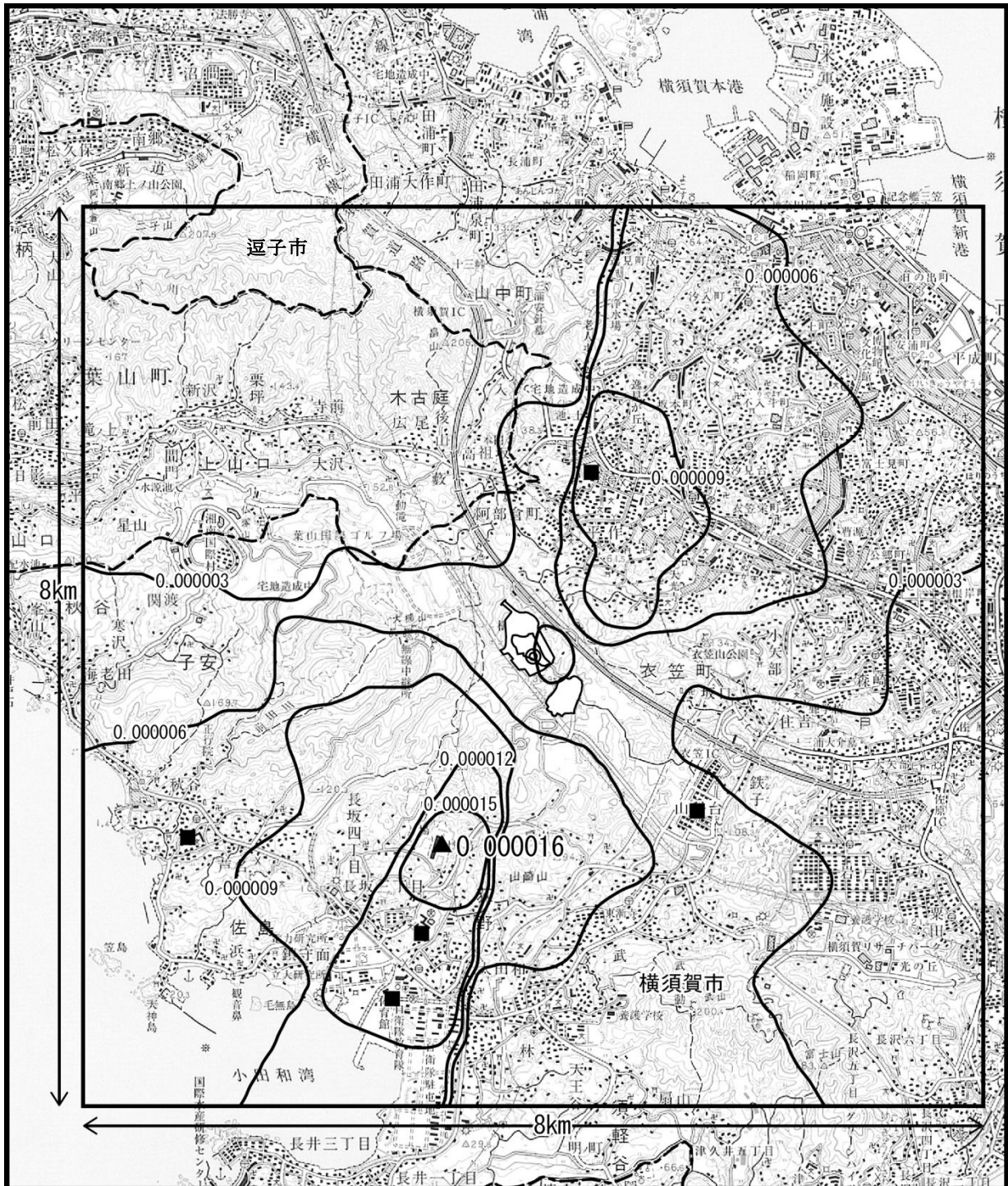
注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。

表 5-2-2-1-36 (4/4) 煙突排ガスによるダイオキシン類濃度の環境濃度予測結果(長期平均濃度)

(単位: pg-TEQ/m³)

予測地点	煙突排ガス 寄与濃度 (A)	バック グラウンド濃度 (B)	環境濃度 予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000002	0.017	0.017002	0.0
荻野小学校	0.000009	0.027	0.027009	0.0
西行政センター	0.000008	0.018	0.018008	0.0
大楠小学校	0.000004	0.018	0.018004	0.0
池上市民プラザ	0.000006	0.019	0.019006	0.0
最大着地濃度地点	0.000009	0.020	0.020009	0.0

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。



凡例

(単位：ppm)

- : 実施区域
- : 市町界
- : 煙源
- : 予測地点 (環境大気現地調査地点)
- : 最大着地濃度地点 (0.000016ppm)

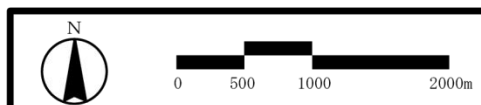
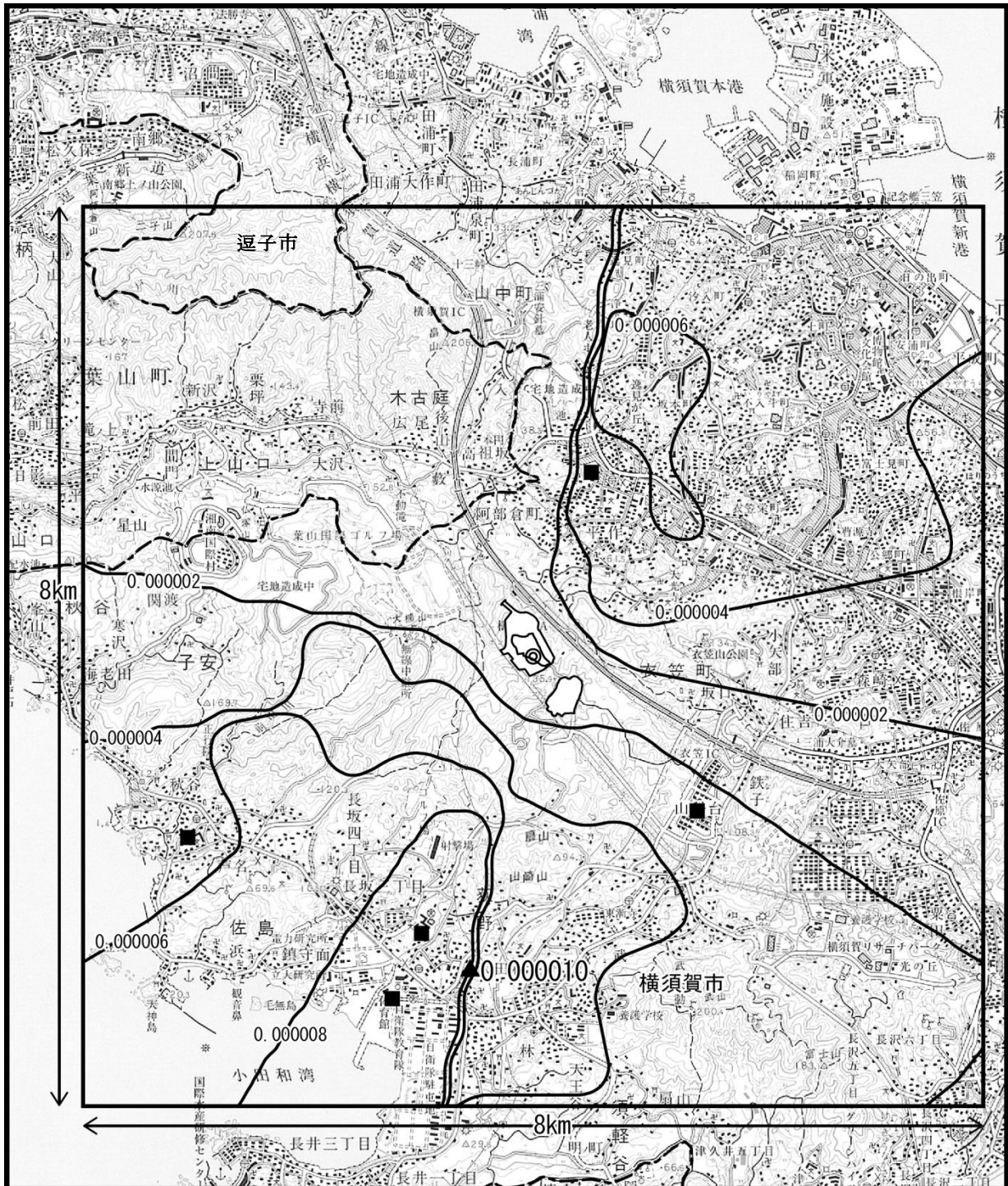


図 5-2-2-1-21 (1/4) 煙突排ガスによる
二酸化硫黄濃度の予測結果 (年平均値)



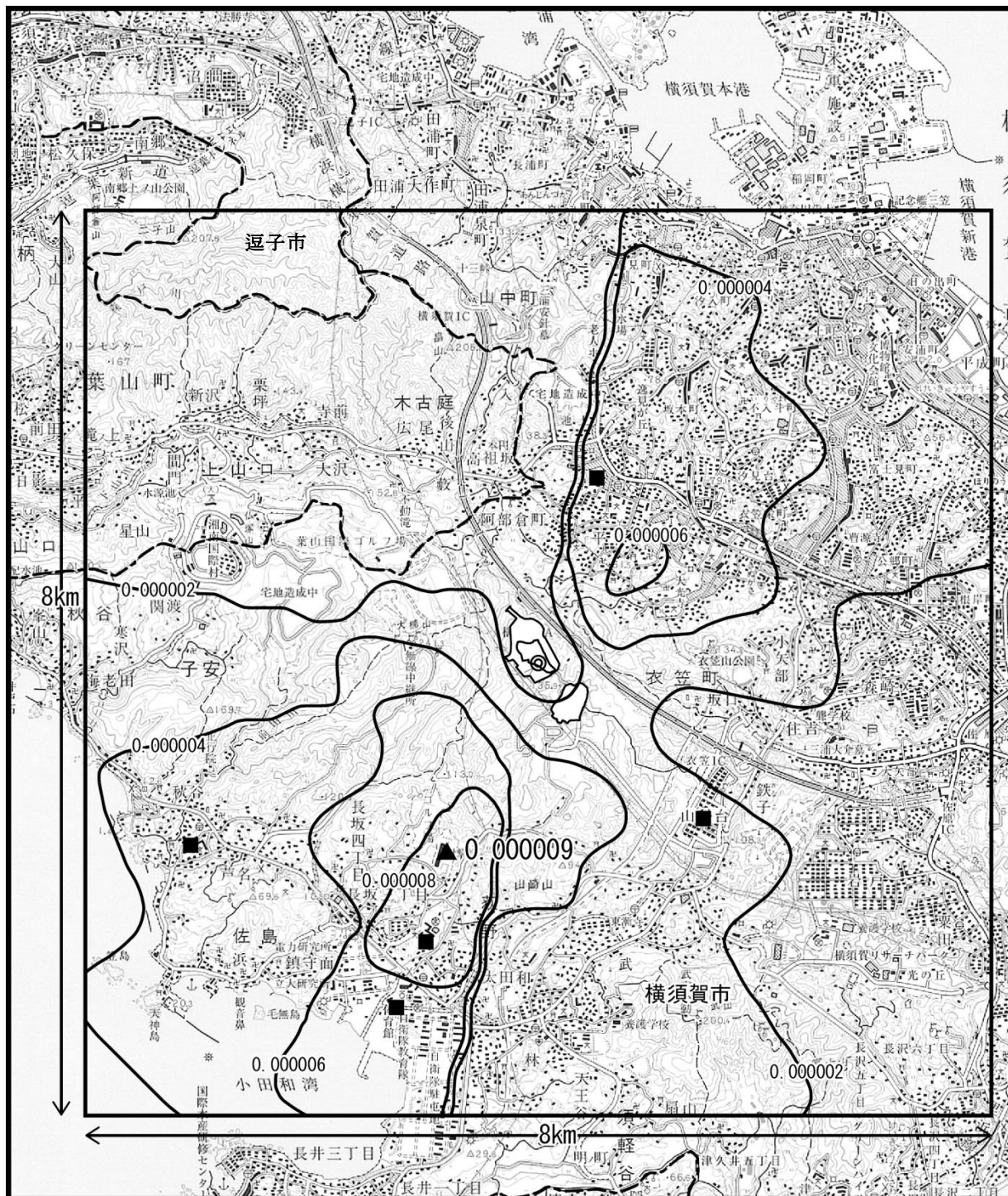
凡 例

(単位：ppm)

- : 実施区域
- : 市町界
- ◎ : 煙源
- : 予測地点 (環境大気現地調査地点)
- : 最大着地濃度地点 (0.000010ppm)



図 5-2-2-1-21 (2/4) 煙突排ガスによる
二酸化窒素濃度の予測結果 (年平均値)



凡例

(単位： mg/m^3)

□ : 実施区域

--- : 市町界

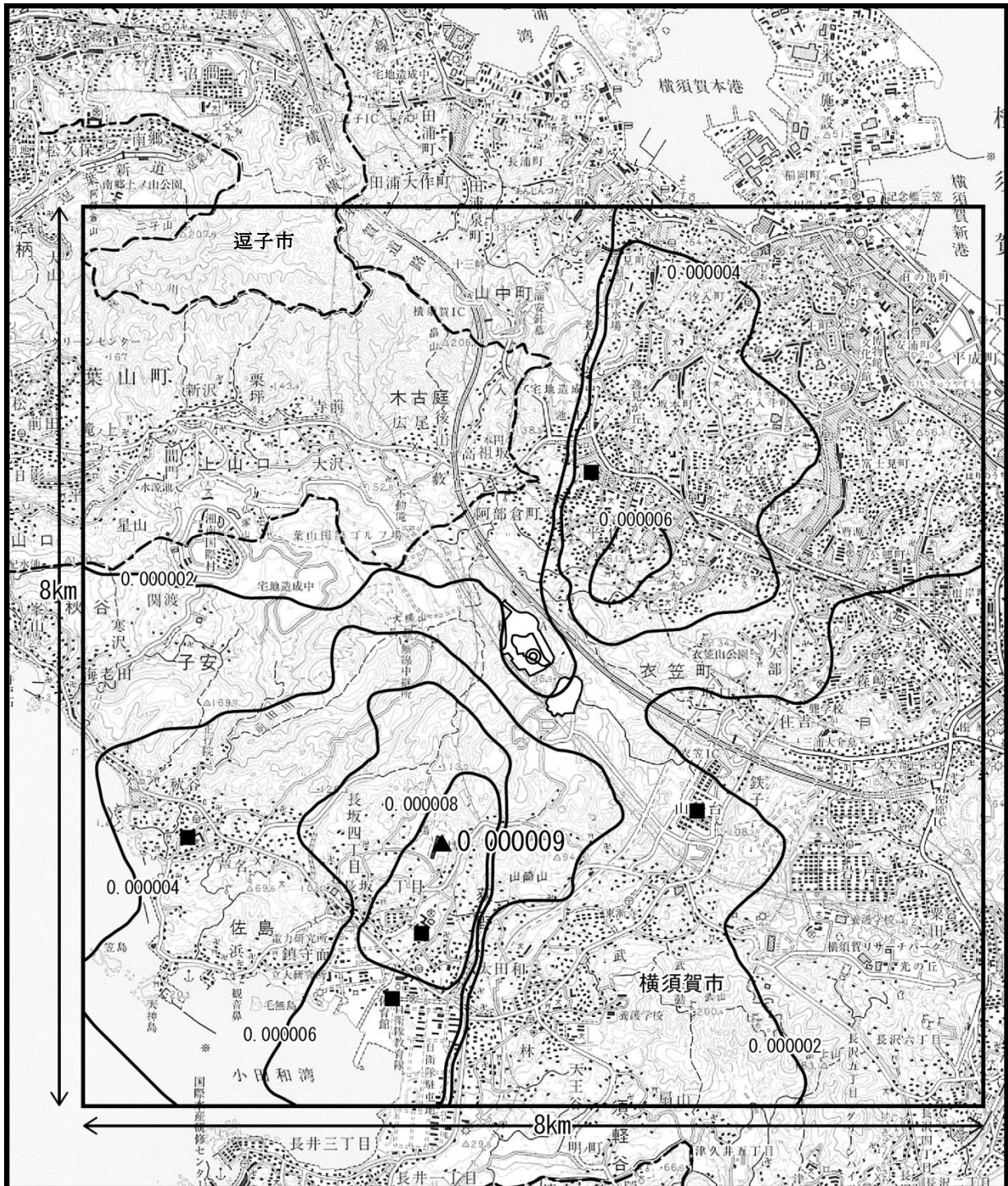
⊙ : 煙源

■ : 予測地点 (環境大気現地調査地点)

▲ : 最大着地濃度地点 (0.000009 mg/m^3)



図 5-2-2-1-21 (3/4) 煙突排ガスによる浮遊粒子状物質濃度の予測結果 (年平均値)



凡例

(単位：pg-TEQ/m³)

- : 実施区域
- : 市町界
- ◎ : 煙源
- : 予測地点 (環境大気現地調査地点)
- ▲ : 最大着地濃度地点 (0.000009pg-TEQ/m³)



図 5-2-2-1-21 (4/4) 煙突排ガスによるダイオキシン類濃度の予測結果 (年平均値)

b 短時間高濃度

a) 大気安定度不安定時

煙突排ガスによる大気安定度不安定時の二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素の寄与濃度予測結果は表 5-2-2-1-37 に、このうち最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果は表 5-2-2-1-38 に、主軸濃度は図 5-2-2-1-22 に示すとおりである。

煙突排ガスによる最大着地濃度は、大気安定度A-B、風速0.7m/sの場合に、風下距離1,240mで二酸化硫黄が0.000324ppm、浮遊粒子状物質が0.000192mg/m³、塩化水素が0.000405ppmであった。また、二酸化窒素は大気安定度A-B、風速0.7m/sの場合に、風下距離1,340mで0.000193ppmであった。

表5-2-2-1-37 煙突排ガスによる大気安定度不安定時の寄与濃度予測結果(短時間高濃度)

大気安定度	風速 (m/s)	最大着地濃度出現距離 (m)	最大着地濃度			
			二酸化硫黄 (ppm)	二酸化窒素 (ppm)	浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	塩化水素 (ppm)
A-B	0.7	1,240 (1,340)	0.000324	0.000193	0.000192	0.000405
B	0.7	2,440 (2,850)	0.000202	0.000178	0.000119	0.000252
A	1.5	710 (740)	0.000312	0.000142	0.000185	0.000390
A-B	1.5	970 (1,050)	0.000270	0.000143	0.000160	0.000338
B	1.5	1,720 (2,010)	0.000185	0.000134	0.000110	0.000232

注) 1. 最大着地濃度出現距離は、二酸化硫黄、浮遊粒子状物質及び塩化水素の最大着地濃度出現距離を示し()内は、二酸化窒素の最大着地濃度出現距離を示す。
2. 風速は、煙突頂部の風速を示す。

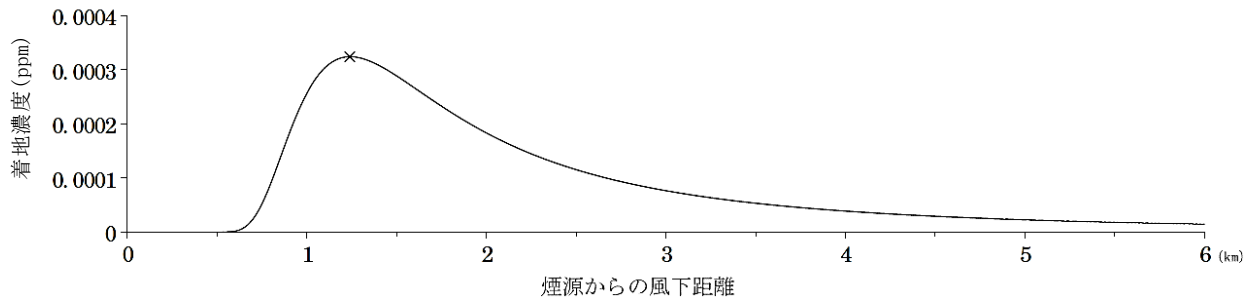
表5-2-2-1-38 煙突排ガスによる大気安定度不安定時の環境濃度予測結果(短時間高濃度)

項目	大気安定度	風速 (m/s)	最大着地濃度出現距離 (m)	煙突排ガス寄与濃度	バックグラウンド濃度	環境濃度予測結果
二酸化硫黄 (ppm)	A-B	0.7	1,240	0.000324	0.009	0.009324
二酸化窒素 (ppm)	A-B	0.7	1,340	0.000193	0.029	0.029193
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	A-B	0.7	1,240	0.000192	0.044	0.044192
塩化水素 (ppm)	A-B	0.7	1,240	0.000405	0.001	0.001405

注) 風速は、煙突頂部の風速を示す。

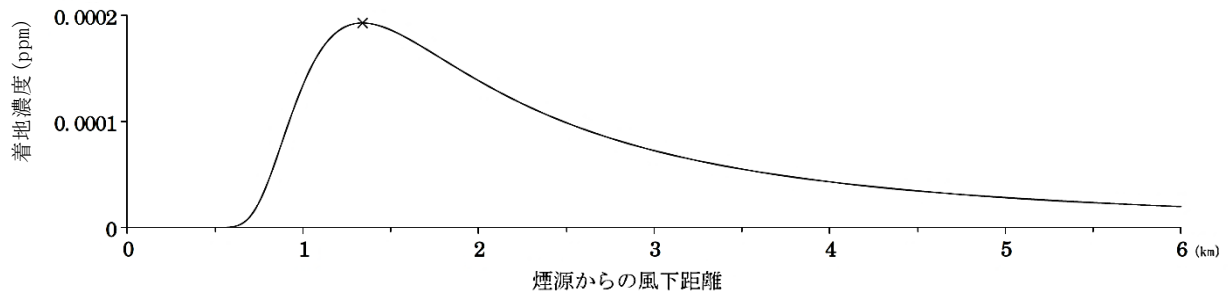
<二酸化硫黄>

風速：0.7 m/s 大気安定度：A- B



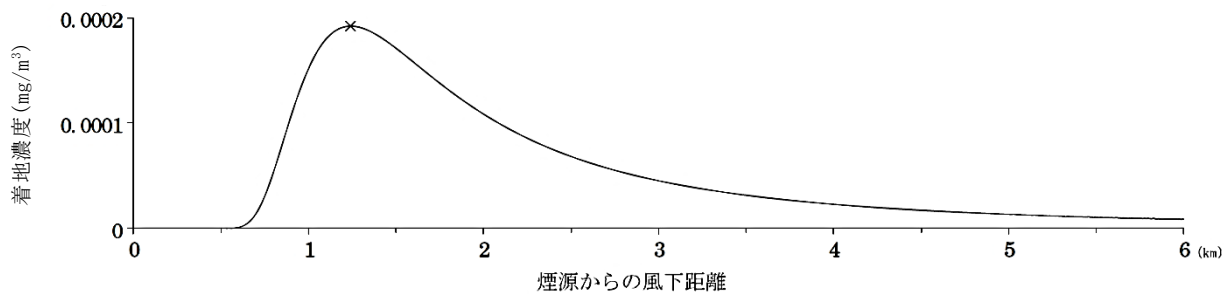
<二酸化窒素>

風速：0.7 m/s 大気安定度：A- B



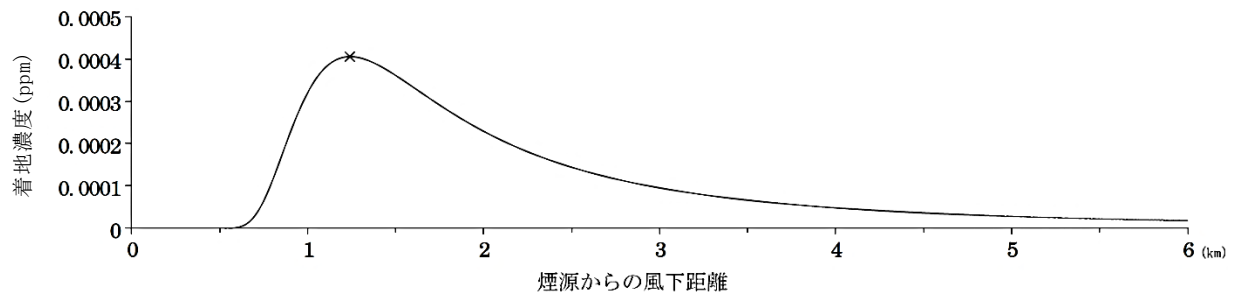
<浮遊粒子状物質>

風速：0.7 m/s 大気安定度：A- B



<塩化水素>

風速：0.7 m/s 大気安定度：A- B



注)「×」は最大着地濃度を示す。

図 5-2-2-1-22 煙突排ガスによる大気安定度不安定時の予測結果
(短時間高濃度、最大着地濃度出現時)

b) 上層逆転時

煙突排ガスによる上層逆転時の二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素の寄与濃度予測結果は表 5-2-2-1-39(1/2)～(2/2)に、このうち最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果は表 5-2-2-1-40 に、主軸濃度は図 5-2-2-1-23 に示すとおりである。

煙突排ガスによる最大着地濃度は、大気安定度D、風速0.8m/sの場合に、風下距離5,910mで二酸化硫黄が0.000791ppm、浮遊粒子状物質が0.000469mg/m³、塩化水素が0.000989ppmであった。また、二酸化窒素は大気安定度D、風速0.8m/sの場合に、風下距離6,000m以上で0.000983ppmであった。

表5-2-2-1-39(1/2) 煙突排ガスによる上層逆転時の寄与濃度予測結果（短時間高濃度）

計算No.	大気安定度	風速(m/s)	最大着地濃度出現距離(m)	最大着地濃度			
				二酸化硫黄(ppm)	二酸化窒素(ppm)	浮遊粒子状物質(mg/m ³)	塩化水素(ppm)
1	D	0.8	5,910(>6,000)	0.000791	0.000983	0.000469	0.000989
2	A-B	4.4	620(660)	0.000281	0.000122	0.000167	0.000352
3	D	6.0	3,110(4,490)	0.000280	0.000267	0.000166	0.000350
4	A-B	3.9	660(730)	0.000296	0.000131	0.000175	0.000369
5	B	5.5	820(930)	0.000214	0.000105	0.000127	0.000268
6	C-D	6.6	2,460(3,570)	0.000169	0.000159	0.000100	0.000212
7	D	4.5	5,540(>6,000)	0.000146	0.000180	0.000086	0.000182
8	D	6.9	3,110(4,550)	0.000243	0.000169	0.000144	0.000304
10	D	4.4	5,570(>6,000)	0.000148	0.000184	0.000088	0.000186
11	D	6.3	4,600(>6,000)	0.000115	0.000100	0.000068	0.000143
12	A-B	4.7	690(790)	0.000297	0.000136	0.000176	0.000372
13	B	5.3	830(940)	0.000216	0.000107	0.000128	0.000270
14	C	7.1	1,310(1,590)	0.000171	0.000108	0.000101	0.000214
15	D	7.1	3,560(5,020)	0.000096	0.000099	0.000057	0.000120
21	C	6.8	850(1,160)	0.000213	0.000109	0.000126	0.000266
22	C	9.0	1,300(1,580)	0.000170	0.000106	0.000100	0.000212
23	D	7.8	4,340(>6,000)	0.000108	0.000126	0.000064	0.000135
24	D	9.6	4,240(>6,000)	0.000106	0.000090	0.000063	0.000133
25	C	8.7	3,310(4,930)	0.000095	0.000069	0.000057	0.000119
26	D	7.8	1,340(1,780)	0.000176	0.000114	0.000104	0.000220
27	D	17.3	1,190(1,450)	0.000160	0.000096	0.000095	0.000200
28	D	4.0	3,360(4,750)	0.000096	0.000095	0.000057	0.000120
29	A-B	4.4	3,010(4,330)	0.000092	0.000062	0.000054	0.000115
30	B	4.1	1,210(1,460)	0.000162	0.000098	0.000096	0.000203
31	A	3.3	3,360(4,750)	0.000096	0.000095	0.000057	0.000120
32	D	2.5	2,360(3,410)	0.000074	0.000060	0.000044	0.000092
33	A-B	3.3	5,000(>6,000)	0.000102	0.000090	0.000060	0.000127
34	A	3.9	620(660)	0.000281	0.000122	0.000167	0.000352
35	D	3.6	910(1,050)	0.000231	0.000120	0.000137	0.000289
36	B	3.3	540(560)	0.000329	0.000134	0.000195	0.000411
37	D	2.8	>6,000(>6,000)	0.000094	0.000117	0.000056	0.000117

- 注) 1. 最大着地濃度出現距離は、二酸化硫黄、浮遊粒子状物質及び塩化水素の最大着地濃度出現距離を示し、()内は、二酸化窒素の最大着地濃度出現距離を示す。
 2. 「計算No.」は「別添5-2-1 1.1 (4) 予測方法」(P. 596) の表5-2-2-1-16に対応する。
 3. 「>6,000」は最大着地濃度出現距離が6,000m以上であることを示す。
 4. 風速は、煙突頂部の風速を示す。

表 5-2-2-1-39 (2/2) 煙突排ガスによる上層逆転時の寄与濃度予測結果（短時間高濃度）

計算 No.	大気 安定度	風 速 (m/s)	最大着地濃度 出現距離 (m)	最大着地濃度			
				二酸化硫黄 (ppm)	二酸化窒素 (ppm)	浮遊粒子状 物質 (mg/m ³)	塩化水素 (ppm)
38	D	4.9	4,430(>6,000)	0.000100	0.000085	0.000059	0.000125
39	D	3.7	5,830(>6,000)	0.000172	0.000157	0.000102	0.000215
40	A-B	3.0	690(740)	0.000661	0.000297	0.000392	0.000826
41	A-B	3.7	660(700)	0.000298	0.000131	0.000177	0.000373
42	A-B	4.7	620(660)	0.000274	0.000118	0.000162	0.000343
43	A-B	3.4	690(740)	0.000584	0.000262	0.000346	0.000729
44	D	3.1	>6,000(>6,000)	0.000112	0.000139	0.000066	0.000140
45	B	3.1	1,230(1,510)	0.000312	0.000190	0.000185	0.000390
47	D	4.0	3,110(4,490)	0.000420	0.000401	0.000249	0.000525
48	D	5.6	4,970(>6,000)	0.000124	0.000150	0.000073	0.000155
49	D	4.3	5,610(>6,000)	0.000151	0.000138	0.000090	0.000189
50	D	3.7	5,290(>6,000)	0.000101	0.000124	0.000060	0.000126
51	D	0.9	>6,000(>6,000)	0.000001	0.000002	0.000001	0.000002
53	B	2.1	1,230(1,430)	0.000257	0.000155	0.000152	0.000321
56	A	3.6	530(550)	0.000317	0.000128	0.000188	0.000396

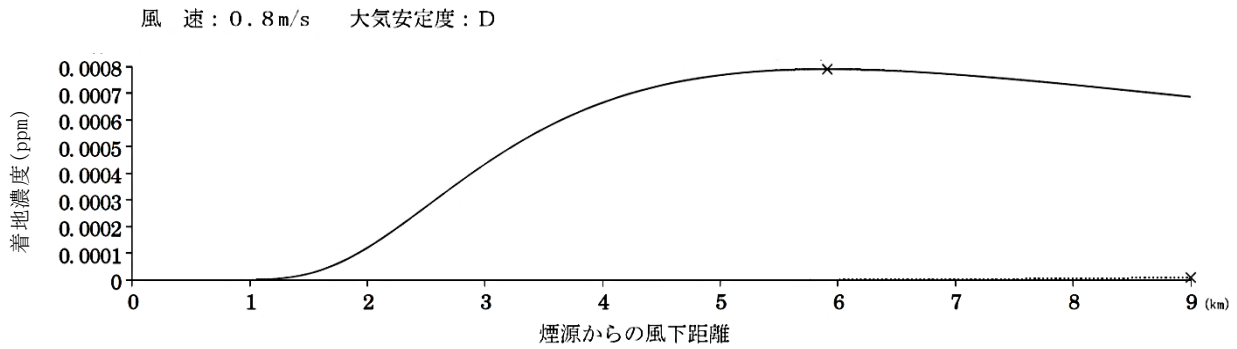
- 注) 1. 最大着地濃度出現距離は、二酸化硫黄、浮遊粒子状物質及び塩化水素の最大着地濃度出現距離を示し、
 ()内は、二酸化窒素の最大着地濃度出現距離を示す。
 2. 「計算No.」は「別添5-2-1 1.1 (4) 予測方法」(P.596) の表5-2-2-1-16に対応する。
 3. 「>6,000」は最大着地濃度出現距離が6,000m以上であることを示す。
 4. 風速は、煙突頂部の風速を示す。

表5-2-2-1-40 煙突排ガスによる上層逆転時の環境濃度予測結果（短時間高濃度）

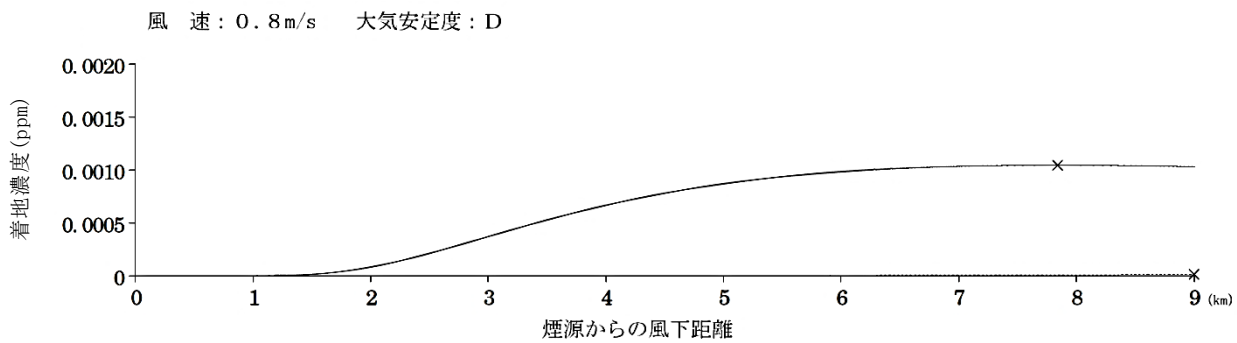
項 目	大気 安定度	風 速 (m/s)	最大 着地濃度 出現距離 (m)	煙突排ガス 寄与濃度	バック グラウンド 濃度	環境濃度 予測結果
二酸化硫黄 (ppm)	D	0.8	5,910	0.000791	0.009	0.009791
二酸化窒素 (ppm)	D	0.8	>6,000	0.000983	0.053	0.053983
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	D	0.8	5,910	0.000469	0.106	0.106469
塩化水素 (ppm)	D	0.8	5,910	0.000989	0.001	0.001989

- 注) 1. 風速は、煙突頂部の風速を示す。
 2. 「>6,000」は最大着地濃度出現距離が6,000m以上であることを示す。

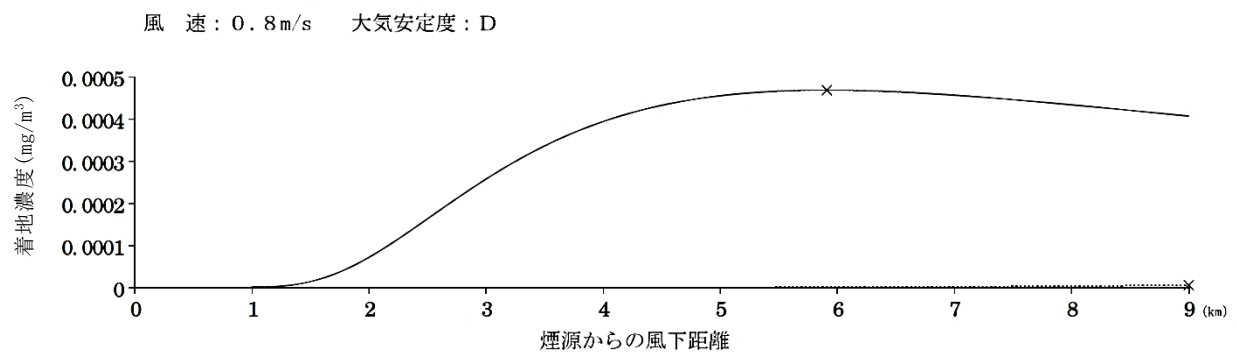
<二酸化硫黄>



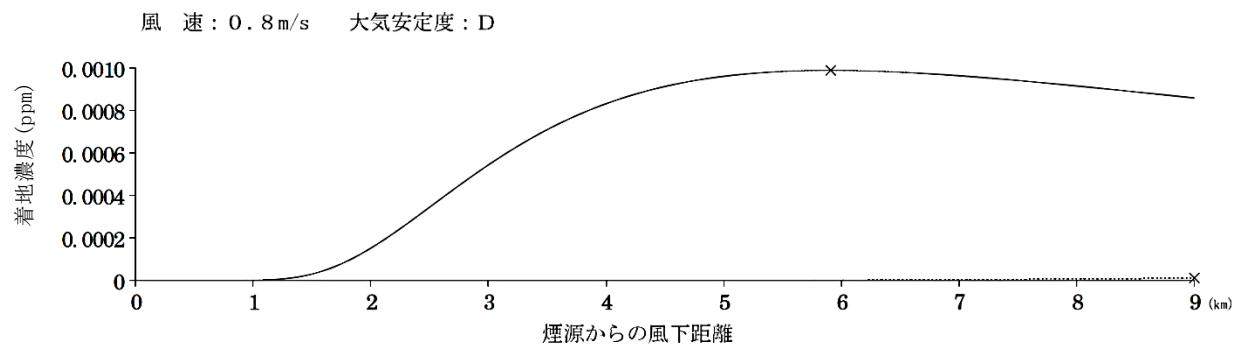
<二酸化窒素>



<浮遊粒子状物質>



<塩化水素>



注)「×」は最大着地濃度を示す。

図5-2-2-1-23 煙突排ガスによる上層逆転時の予測結果
(短時間高濃度、最大着地濃度出現時)

c) 接地逆転層崩壊時

煙突排ガスによる接地逆転層崩壊時の二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素の寄与濃度予測結果は表5-2-2-1-41に、このうち最大着地濃度出現時の予測結果は表5-2-2-1-42に示すとおりである。

煙突排ガスによる最大着地濃度は、大気安定度D、風速1.6m/sの場合に、風下距離1,857mで二酸化硫黄が0.001362ppm、二酸化窒素が0.001084ppm、浮遊粒子状物質が0.000851mg/m³、塩化水素が0.001702ppmであった。

表5-2-2-1-41 煙突排ガスによる接地逆転層崩壊時の寄与濃度予測結果（短時間高濃度）

計算No.	大気安定度	風速(m/s)	最大着地濃度出現距離(m)	最大着地濃度			
				二酸化硫黄(ppm)	二酸化窒素(ppm)	浮遊粒子状物質(mg/m ³)	塩化水素(ppm)
1	D	1.6	1,857	0.001362	0.001084	0.000851	0.001702
2	D	3.7	3,115	0.000697	0.000695	0.000436	0.000872
3	D	3.6	3,248	0.000709	0.000721	0.000443	0.000886
4	D	4.4	5,186	0.000534	0.000672	0.000334	0.000667
5	D	4.4	3,803	0.000575	0.000629	0.000359	0.000719

注) 1. 「計算No.」は「別添5-2-1 1.1 (4)予測方法」(P.600)の表5-2-2-1-18に対応する。
2. 風速は、煙突頂部の風速を示す。

表5-2-2-1-42 煙突排ガスによる接地逆転層崩壊時の環境濃度予測結果（短時間高濃度）

項目	大気安定度	風速(m/s)	最大着地濃度出現距離(m)	煙突排ガス寄与濃度	バックグラウンド濃度	環境濃度予測結果
二酸化硫黄(ppm)	D	1.6	1,857	0.001362	0.000	0.001362
二酸化窒素(ppm)	D	1.6	1,857	0.001084	0.016	0.017084
浮遊粒子状物質(mg/m ³)	D	1.6	1,857	0.000851	0.047	0.047851
塩化水素(ppm)	D	1.6	1,857	0.001702	0.001	0.002702

注) 風速は、煙突頂部の風速を示す。

d) ダウンウォッシュ時

煙突排ガスによるダウンウォッシュ時の二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素濃度の予測結果は、表5-2-2-1-43及び図5-2-2-1-24に、このうち最大着地濃度出現時の予測結果は、表5-2-2-1-44に示すとおりである。

煙突排ガスによる最大着地濃度は、大気安定度C、風速16.7m/sの場合に、風下距離660mで二酸化硫黄が0.000234ppm、二酸化窒素が0.000095ppm、浮遊粒子状物質が0.000146mg/m³、塩化水素が0.000293ppmであった。

表5-2-2-1-43 煙突排ガスによるダウンウォッシュ時の寄与濃度予測結果(短時間高濃度)

大気安定度	風速 (m/s)	最大着地濃度出現距離 (m)	最大着地濃度			
			二酸化硫黄 (ppm)	二酸化窒素 (ppm)	浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	塩化水素 (ppm)
C	16.7	660	0.000234	0.000095	0.000146	0.000293
D	16.7	1,350	0.000169	0.000094	0.000106	0.000212

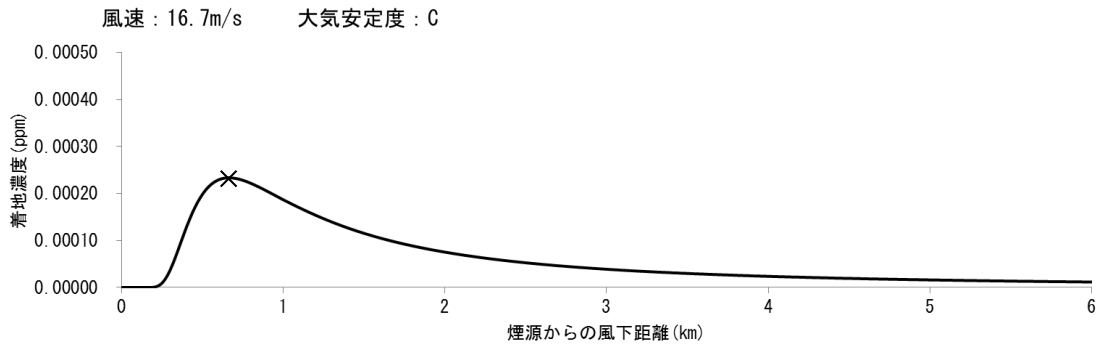
注) 風速は、煙突頂部の風速を示す。

表5-2-2-1-44 煙突排ガスによるダウンウォッシュ時の予測結果 (短時間高濃度)

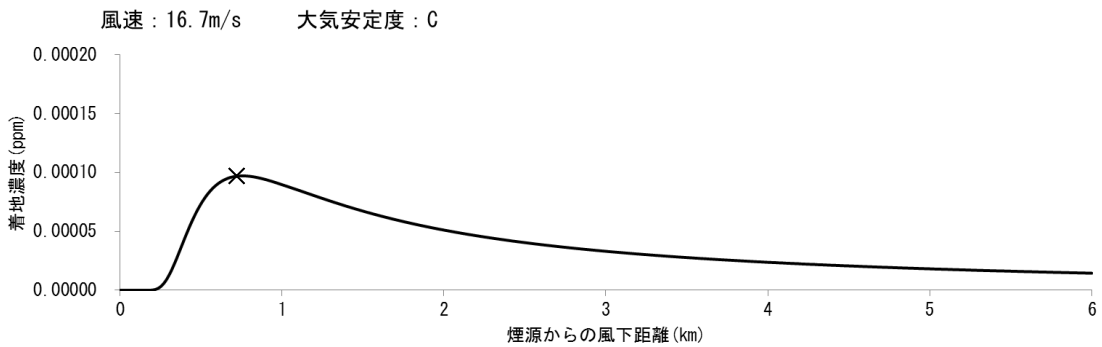
項目	大気安定度	風速 (m/s)	最大着地濃度出現距離 (m)	煙突排ガス寄与濃度	バックグラウンド濃度	環境濃度予測結果
二酸化硫黄 (ppm)	C	16.7	660	0.000234	0.003	0.003234
二酸化窒素 (ppm)	C	16.7	660	0.000095	0.006	0.006095
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	C	16.7	660	0.000146	0.023	0.023146
塩化水素 (ppm)	C	16.7	660	0.000293	0.001	0.001293

注) 風速は、煙突頂部の風速を示す。

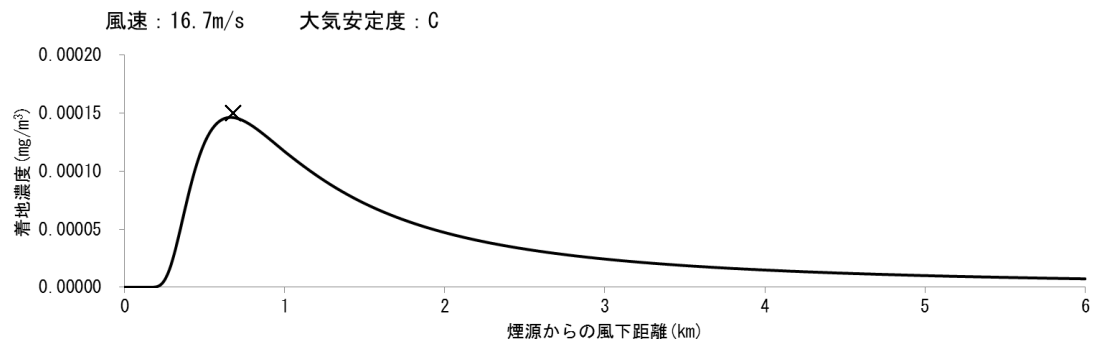
<二酸化硫黄>



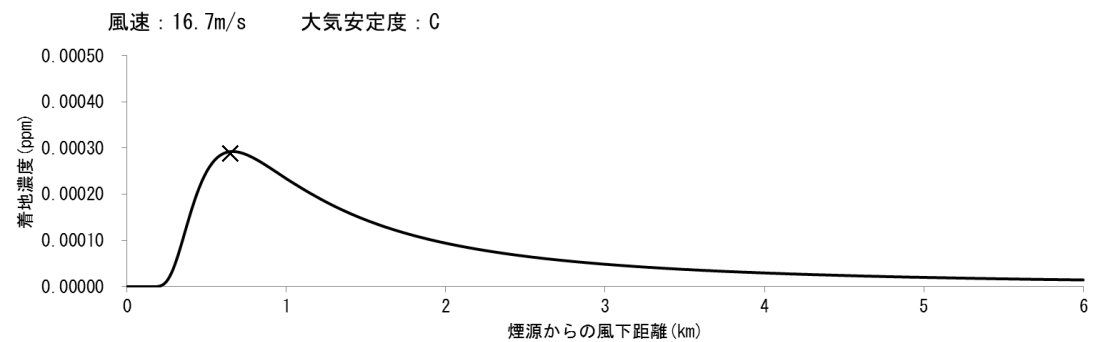
<二酸化窒素>



<浮遊粒子状物質>



<塩化水素>



注) 「×」は最大着地濃度を示す。

図5-2-2-1-24 煙突排ガスによるダウンウォッシュ時の予測結果
(短時間高濃度、最大着地濃度出現時)

c 風洞実験（地形影響）

a) 煙流し実験

煙流し実験では、地形の影響を受けて煙軸高さが低下するなどの状況が観察された。この地形影響の程度については、1時間値地表濃度分布測定結果において考察する。

b) 1時間値

1時間値地表濃度分布測定結果は表5-2-2-1-45に、最大着地濃度比及び最大着地濃度出現距離比は、表5-2-2-1-46に示すとおりである。また、地表濃度分布測定結果は、図5-2-2-1-25(1/3)～(3/3)に示すとおりである。

最大着地濃度比は、北北東の風で2.3、南南西の風で2.1、西の風で3.8であった。

表5-2-2-1-45 風洞実験1時間値地表濃度分布測定結果

風向	有効煙突高 (m)	平板実験		地形実験	
		Rd_{max} ($\times 10^{-5}$)	X_{max} (m)	Rd_{max} ($\times 10^{-5}$)	X_{max} (m)
北北東	128	17.8	2,400	40.7	1,100
南南西	90	34.7	1,400	74.5	1,000
西	128	17.8	2,400	68.5	700

注) 1. Rd_{max} は最大着地濃度希釈比（=最大着地濃度/煙突出口濃度）を示す。

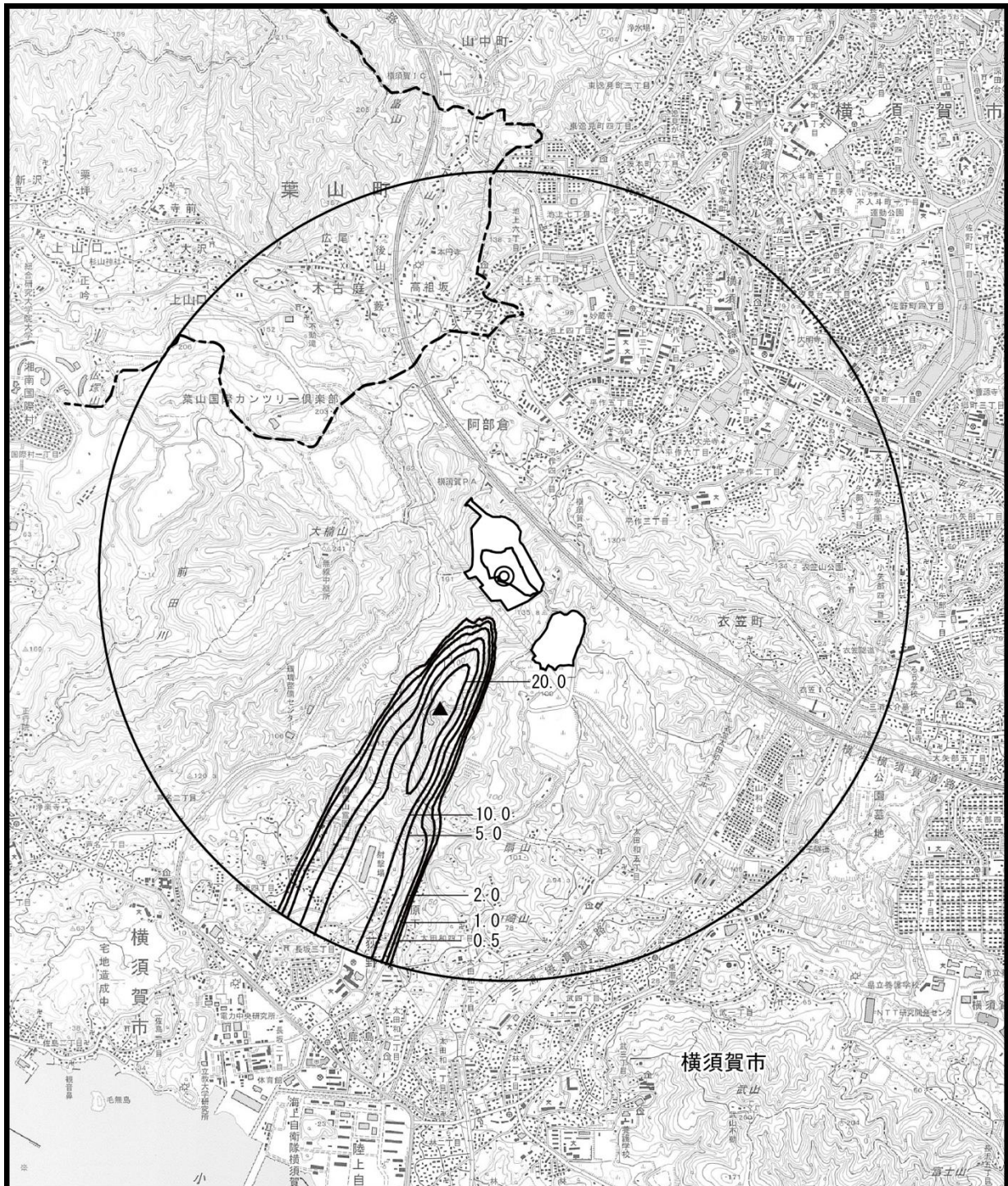
2. X_{max} は最大着地濃度出現距離を示す。

表5-2-2-1-46 最大着地濃度比及び最大着地濃度出現距離比（1時間値）

風向	有効煙突高 (m)	平板実験		地形実験	
		Rd_{max} ($\times 10^{-5}$)	X_{max} (m)	α	β
北北東	128	17.8	2,400	2.3	0.46
南南西	90	34.7	1,400	2.1	0.71
西	128	17.8	2,400	3.8	0.29

注) 1. α は最大着地濃度比（=地形実験での Rd_{max} /平板実験での Rd_{max} ）を示す。

2. β は最大着地濃度出現距離比（=地形実験での X_{max} /平板実験での X_{max} ）を示す。



凡 例

□ : 実施区域

--- : 市町界

⊙ : 煙源

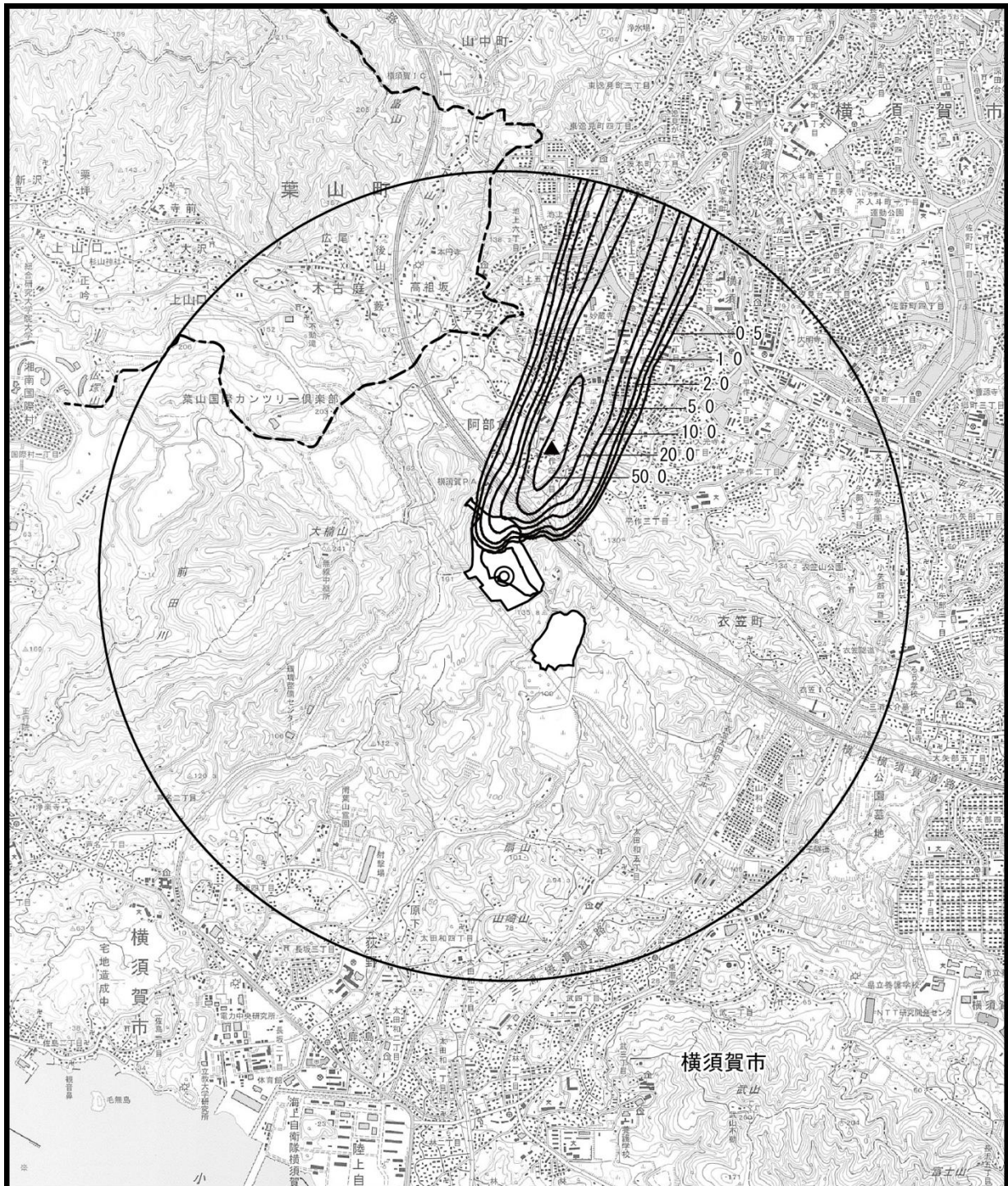
▲ : 最大着地濃度地点

(着地濃度希釈比 (Rd: ($\times 10^{-5}$)))

$$Rd = \frac{\text{着地濃度}}{\text{煙突出口濃度}}$$



図5-2-2-1-25 (1/3) 風洞実験1時間値
地表濃度分布測定結果 (北北東風)



凡例

□ : 実施区域

--- : 市町界

⊙ : 煙源

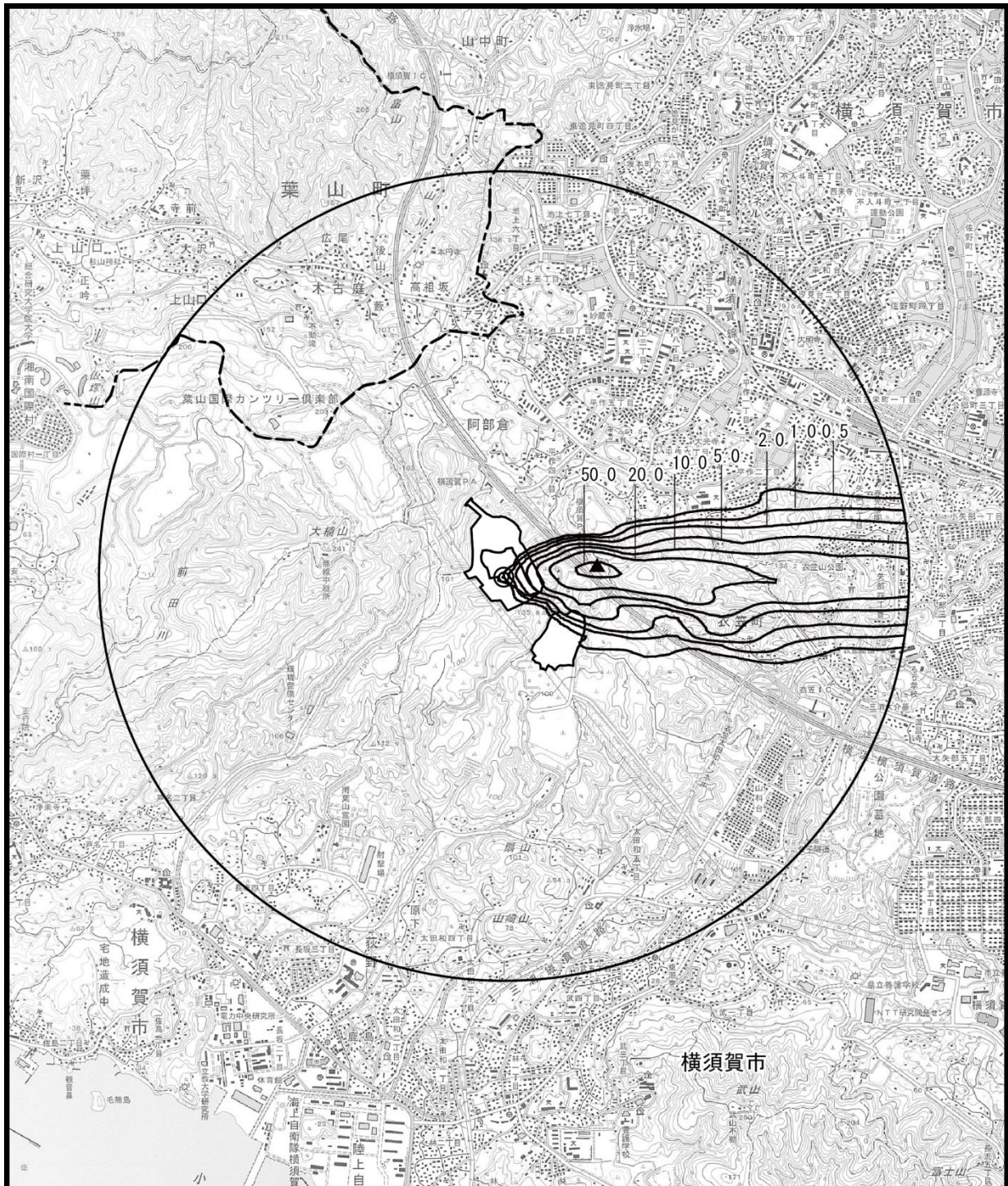
▲ : 最大着地濃度地点

(着地濃度希釈比 (Rd: (×10⁻⁵)))

$$Rd = \frac{\text{着地濃度}}{\text{煙突出口濃度}}$$



図5-2-2-1-25 (2/3) 風洞実験1時間値
地表濃度分布測定結果 (南南西風)



凡 例

- : 実施区域
- : 市町界
- : 煙源
- : 最大着地濃度地点

(着地濃度希釈比 (Rd: ($\times 10^{-5}$)))

$$Rd = \frac{\text{着地濃度}}{\text{煙突出口濃度}}$$



図5-2-2-1-25 (3/3) 風洞実験1時間値
地表濃度分布測定結果 (西風)

c) 地形影響を考慮した長期平均濃度

「長期平均濃度」の長期平均濃度予測結果に対し、最大着地濃度比 α が最大となる西風の場合における3.8を乗じることで、地形影響を考慮した煙突排ガス寄与濃度を予測した。

地形影響を考慮した煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及びダイオキシン類の環境濃度予測結果は、表5-2-2-1-47(1/4)～(4/4)に示すとおりである。

施設の稼働に伴う地形影響を考慮した最大着地濃度は、二酸化硫黄が0.000061ppmで寄与率が5.7%、二酸化窒素が0.000038ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質が0.000034mg/m³で寄与率が0.2%、ダイオキシン類が0.000035pg-TEQ/m³で寄与率が0.2%であった。

表5-2-2-1-47(1/4) 地形影響を考慮した煙突排ガスによる二酸化硫黄濃度の環境濃度予測結果（長期平均濃度）

(単位：ppm)

予測地点	煙突排ガス寄与濃度 (ブルーム・パフ式) (a)	最大着地濃度比 α (b)	地形影響を考慮した 煙突排ガス寄与濃度 (A)=(a×b)	バックグラウンド濃度 (B)	環境濃度予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000004	3.8	0.000015	0.001	0.001015	1.5
荻野小学校	0.000014	3.8	0.000053	0.001	0.001053	5.1
西行政センター	0.000012	3.8	0.000046	0.001	0.001046	4.4
大楠小学校	0.000007	3.8	0.000027	0.001	0.001027	2.6
池上市民プラザ	0.000007	3.8	0.000027	0.001	0.001027	2.6
最大着地濃度地点	0.000016	3.8	0.000061	0.001	0.001061	5.7

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。

表5-2-2-1-47(2/4) 地形影響を考慮した煙突排ガスによる二酸化窒素濃度の環境濃度予測結果（長期平均濃度）

(単位：ppm)

予測地点	煙突排ガス寄与濃度 (ブルーム・パフ式) (a)	最大着地濃度比 α (b)	地形影響を考慮した 煙突排ガス寄与濃度 (A)=(a×b)	バックグラウンド濃度 (B)	環境濃度予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000003	3.8	0.000011	0.012	0.012011	0.1
荻野小学校	0.000010	3.8	0.000038	0.012	0.012038	0.3
西行政センター	0.000009	3.8	0.000034	0.013	0.013034	0.3
大楠小学校	0.000005	3.8	0.000019	0.013	0.013019	0.1
池上市民プラザ	0.000006	3.8	0.000023	0.015	0.015023	0.2
最大着地濃度地点	0.000010	3.8	0.000038	0.013	0.013038	0.3

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約2,900mの地点である。

表5-2-2-1-47(3/4) 地形影響を考慮した煙突排ガスによる浮遊粒子状物質濃度の環境濃度予測結果（長期平均濃度）

(単位：mg/m³)

予測地点	煙突排ガス寄与濃度 (プルーム・パフ式) (a)	最大着地濃度比 α (b)	地形影響を考慮した 煙突排ガス寄与濃度 (A)=(a×b)	バックグラウンド濃度 (B)	環境濃度予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000002	3.8	0.000008	0.019	0.019008	0.0
荻野小学校	0.000008	3.8	0.000030	0.019	0.019030	0.2
西行政センター	0.000007	3.8	0.000027	0.021	0.021027	0.1
大楠小学校	0.000004	3.8	0.000015	0.020	0.020015	0.1
池上市民プラザ	0.000006	3.8	0.000023	0.020	0.020023	0.1
最大着地濃度地点	0.000009	3.8	0.000034	0.020	0.020034	0.2

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。

表5-2-2-1-47(4/4) 地形影響を考慮した煙突排ガスによるダイオキシン類濃度の環境濃度予測結果（長期平均濃度）

(単位：pg-TEQ/m³)

予測地点	煙突排ガス寄与濃度 (プルーム・パフ式) (a)	最大着地濃度比 α (b)	地形影響を考慮した 煙突排ガス寄与濃度 (A)=(a×b)	バックグラウンド濃度 (B)	環境濃度予測結果 (A+B)	寄与率 (%) (A/(A+B))
山科台公園	0.000002	3.8	0.000009	0.017	0.017009	0.1
荻野小学校	0.000009	3.8	0.000033	0.027	0.027033	0.1
西行政センター	0.000008	3.8	0.000029	0.018	0.018029	0.2
大楠小学校	0.000004	3.8	0.000017	0.018	0.018017	0.1
池上市民プラザ	0.000006	3.8	0.000022	0.019	0.019022	0.1
最大着地濃度地点	0.000009	3.8	0.000035	0.020	0.020035	0.2

注) 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。

d) 地形影響を考慮した短時間高濃度

「短時間高濃度」で、地形影響が考えられるダウンウォッシュ時の短時間高濃度予測結果に対し、最大着地濃度比 α が最大となる西風の場合における3.8を乗じることで、地形影響を考慮した煙突排ガス寄与濃度を予測した。

地形影響を考慮した煙突排ガスによるダウンウォッシュ時の環境濃度予測結果は、表5-2-2-1-48に示すとおりである。

表5-2-2-1-48 地形影響を考慮した煙突排ガスによる
ダウンウォッシュ時の環境濃度予測結果（短時間高濃度）

項目	大気安定度	風速 (m/s)	最大着地濃度出現距離 (m)	煙突排ガス寄与濃度 (プルーム・パフ式) (a)	最大着地濃度比 α (b)	地形影響を考慮した煙突排ガス寄与濃度 (A)=(a×b)	バックグラウンド濃度 (B)	環境濃度予測結果 (A+B)
二酸化硫黄 (ppm)	C	16.7	660	0.000234	3.8	0.000888	0.003	0.003888
二酸化窒素 (ppm)	C	16.7	660	0.000095	3.8	0.000360	0.006	0.006360
浮遊粒子状物質 (mg/m ³)	C	16.7	660	0.000146	3.8	0.000556	0.023	0.023556
塩化水素 (ppm)	C	16.7	660	0.000293	3.8	0.001112	0.001	0.002112

注) 1. 風速は、煙突頂部の風速を示す。
2. 最大着地濃度比 α は、最大着地濃度比 α の最大値として西風の場合の3.8を設定した。

イ) 関係車両の走行

a 第1段階（既設道路の改修完了前）

廃棄物処理施設の稼働が定常の状態となる第1段階（既設道路の改修完了前）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表5-2-2-1-49 (1/2)～(2/2)及び図5-2-2-1-26 (1/2)～(2/2)に示すとおりである。

関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度（年平均値）は、平作の南側道路端で、二酸化窒素濃度が0.000471ppmで寄与率が2.9%、浮遊粒子状物質濃度が0.000078mg/m³で寄与率が0.4%であった。大矢部の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000152ppmで寄与率が0.9%、浮遊粒子状物質濃度が0.000027mg/m³で寄与率が0.1%であった。山科台の北側道路端では、関係車両は通行がないため寄与率は0%であった。武の西側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000022ppmで寄与率が0.1%、浮遊粒子状物質濃度が0.000004mg/m³で寄与率が0.0%であった。芦名の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000047 ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000009mg/m³で寄与率が0.0%であった。

表5-2-2-1-49(1/2) 関係車両の走行（第1段階）に伴う二酸化窒素濃度の
予測結果（年平均値）

（単位：ppm）

予測地点	関係車両 寄与濃度 (NO _x) (A)	一般車両 寄与濃度 (NO _x) (B)	バックグ ラウンド 濃度 (NO _x) (C)	環境濃度 予測結果 (NO _x) (D=A+B+C)	環境濃度 予測結果 (NO ₂) (E=Dの 変換)	バック グラウン ド濃度 (NO ₂) (F=B+Cの 変換)	関係車両 の影響 (NO ₂) (G=E-F)	寄与率 (%) (G/E)
平作 南側道路端	0.001132	0.005232	0.014	0.020364	0.016334	0.015863	0.000471	2.9
大矢部 北側道路端	0.000396	0.009241	0.014	0.023638	0.017628	0.017476	0.000152	0.9
山科台 北側道路端	0	0.001869	0.014	0.015869	0.014377	0.014377	0	0
武 西側道路端	0.000062	0.014333	0.014	0.028395	0.019361	0.019339	0.000022	0.1
芦名 北側道路端	0.000131	0.012643	0.014	0.026774	0.018788	0.018740	0.000047	0.3

注)「0」は関係車両の影響がないことを示す。

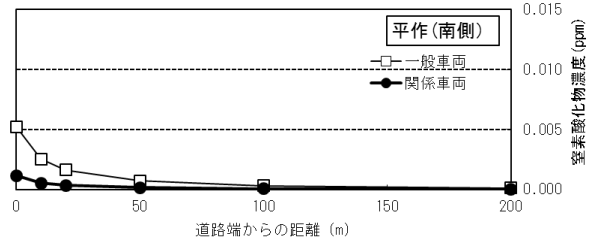
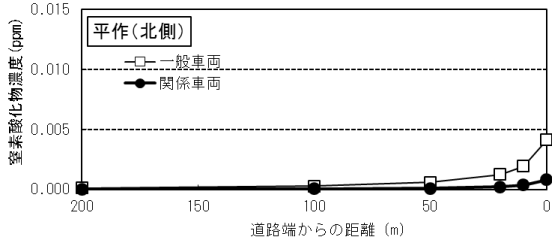
表 5-2-2-1-49(2/2) 関係車両の走行（第1段階）に伴う浮遊粒子状物質濃度の
予測結果（年平均値）

（単位：mg/m³）

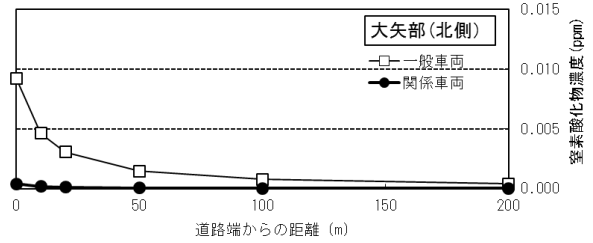
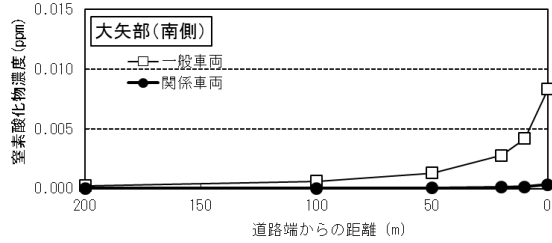
予測地点	関係車両 寄与濃度 (A)	一般車両 寄与濃度 (B)	バック グラウンド濃度 (C)	環境濃度 予測結果 (A+B+C)	寄与率 (%) (A/(A+B+C))
平作 北側道路端	0.000078	0.000338	0.021	0.021416	0.4
大矢部 北側道路端	0.000027	0.000602	0.021	0.021629	0.1
山科台 北側道路端	0	0.000120	0.021	0.021120	0
武 西側道路端	0.000004	0.000926	0.021	0.021931	0.0
芦名 北側道路端	0.000009	0.000824	0.021	0.021833	0.0

注)「0」は関係車両の影響がないことを示す。

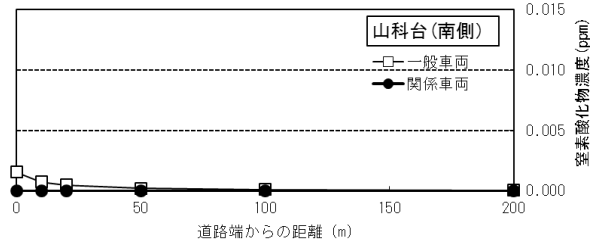
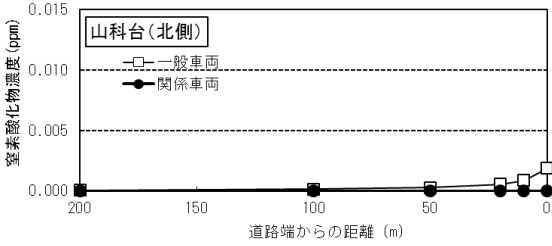
< 平作 >



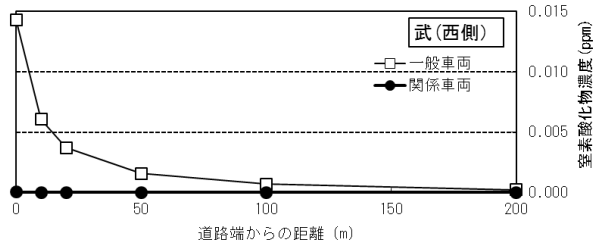
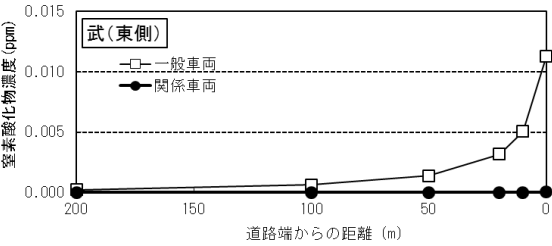
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

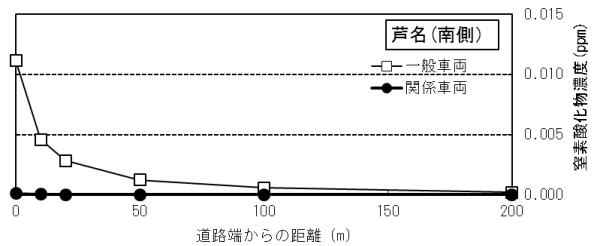
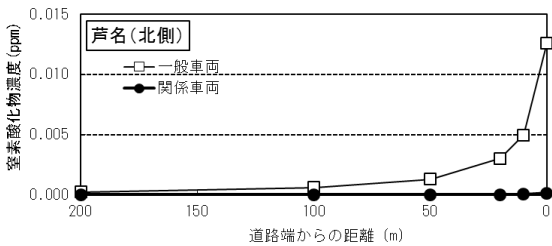
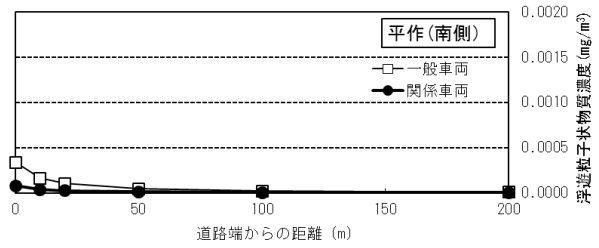
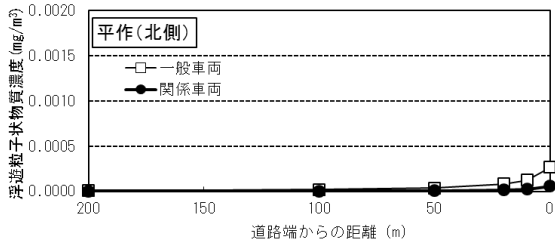
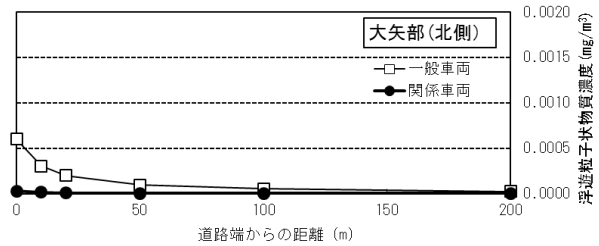
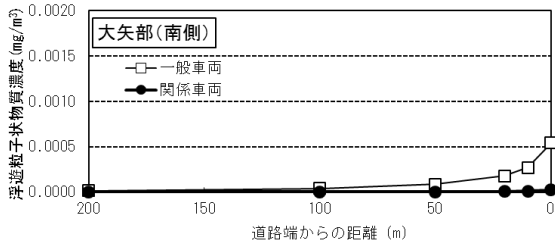


図 5-2-2-1-26 (1/2) 関係車両の走行 (第 1 段階) に伴う窒素酸化物濃度の予測結果 (年平均値)

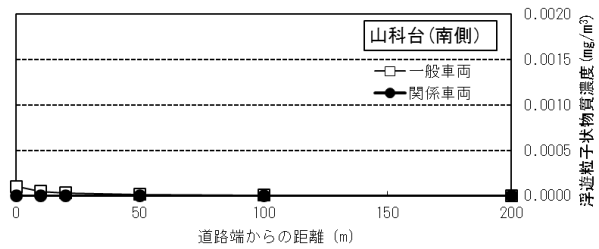
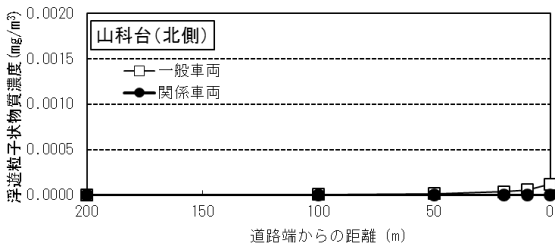
< 平作 >



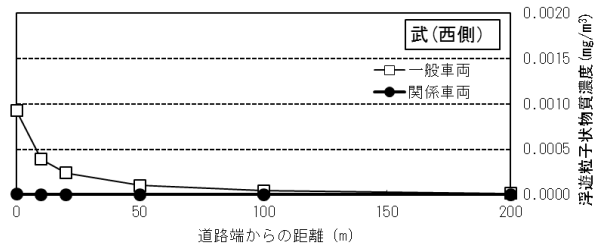
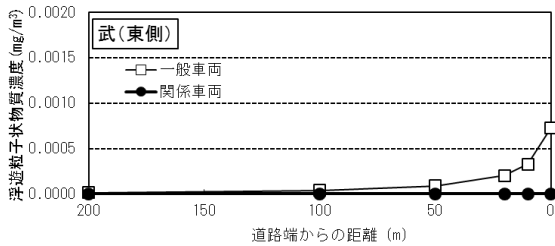
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

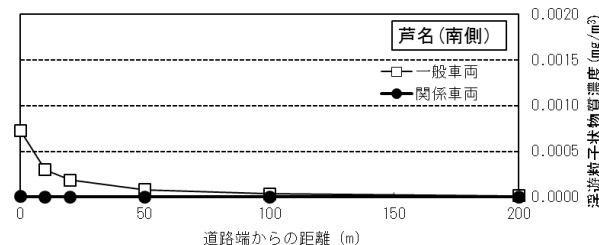
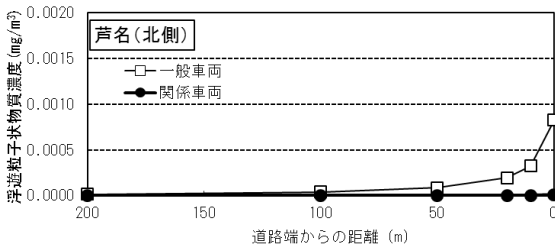


図5-2-2-1-26(2/2) 関係車両の走行(第1段階)に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果(年平均値)

b 第2段階（既設道路の改修完了後）

廃棄物処理施設の稼働が定常の状態となる第2段階（既設道路の改修完了後）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度は、表5-2-2-1-50(1/2)～(2/2)及び図5-2-2-1-27(1/2)～(2/2)に示すとおりである。

関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の最大着地濃度（年平均値）は、平作の南側道路端で、二酸化窒素濃度が0.000362ppmで寄与率が2.2%、浮遊粒子状物質濃度が0.000060mg/m³で寄与率が0.3%であった。大矢部の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000151ppmで寄与率が0.9%、浮遊粒子状物質濃度が0.000027mg/m³で寄与率が0.1%であった。山科台の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000149ppmで寄与率が1.0%、浮遊粒子状物質濃度が0.000022mg/m³で寄与率が0.1%であった。武の西側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000061ppmで寄与率が0.3%、浮遊粒子状物質濃度が0.000012mg/m³で寄与率が0.1%であった。芦名の北側道路端では、二酸化窒素濃度が0.000007ppmで寄与率が0.0%、浮遊粒子状物質濃度が0.000001mg/m³で寄与率が0.0%であった。

表5-2-2-1-50(1/2) 関係車両の走行（第2段階）に伴う二酸化窒素濃度の予測結果（年平均値）

（単位：ppm）

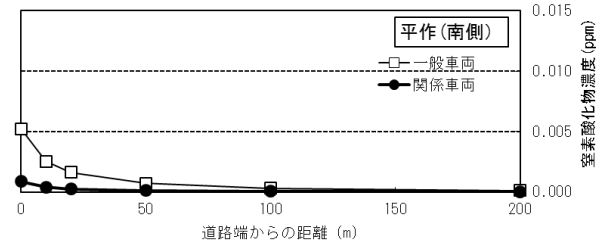
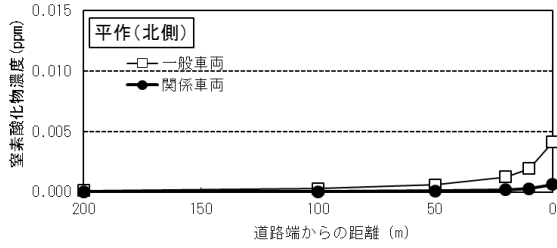
予測地点	関係車両 寄与濃度 (NO _x) (A)	一般車両 寄与濃度 (NO _x) (B)	バックグ ラウンド 濃度 (NO _x) (C)	環境濃度 予測結果 (NO _x) (D=A+B+C)	環境濃度 予測結果 (NO ₂) (E=Dの 変換)	バックグ ラウンド 濃度 (NO ₂) (F=B+Cの 変換)	関係車両 の影響 (NO ₂) (G=E-F)	寄与率 (%) (G/E)
平作 南側道路端	0.000868	0.005232	0.014	0.020101	0.016225	0.015863	0.000362	2.2
大矢部 北側道路端	0.000395	0.009241	0.014	0.023637	0.017627	0.017476	0.000151	0.9
山科台 北側道路端	0.000323	0.001869	0.014	0.016192	0.014526	0.014377	0.000149	1.0
武 西側道路端	0.000176	0.014333	0.014	0.028508	0.019400	0.019339	0.000061	0.3
芦名 北側道路端	0.000020	0.012643	0.014	0.026663	0.018748	0.018740	0.000007	0.0

表5-2-2-1-50(2/2) 関係車両の走行（第2段階）に伴う浮遊粒子状物質濃度の
予測結果（年平均値）

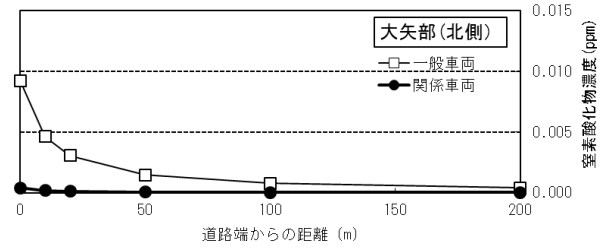
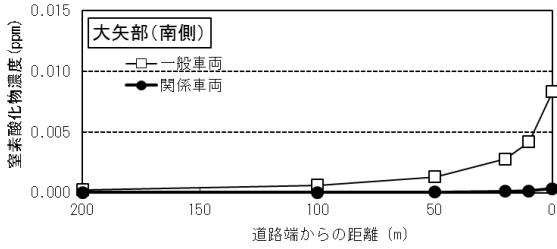
（単位：mg/m³）

予測地点	関係車両 寄与濃度 (A)	一般車両 寄与濃度 (B)	バック グラウンド濃度 (C)	環境濃度 予測結果 (A+B+C)	寄与率 (%) (A/(A+B+C))
平作 南側道路端	0.000060	0.000338	0.021	0.021398	0.3
大矢部 北側道路端	0.000027	0.000602	0.021	0.021629	0.1
山科台 北側道路端	0.000022	0.000120	0.021	0.021143	0.1
武 西側道路端	0.000012	0.000926	0.021	0.021938	0.1
芦名 北側道路端	0.000001	0.000824	0.021	0.021826	0.0

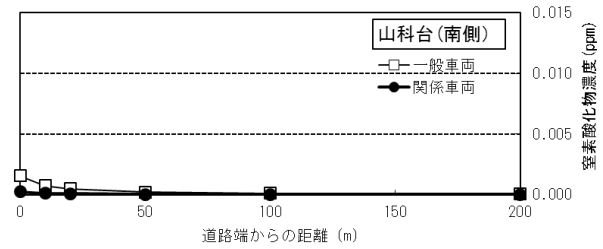
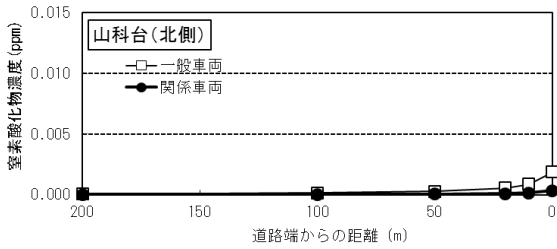
< 平作 >



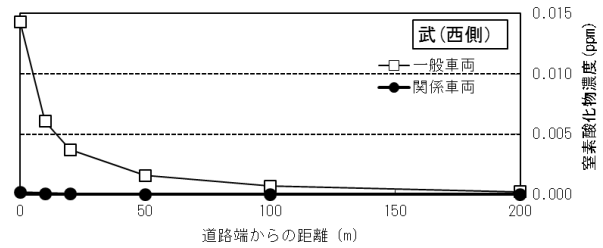
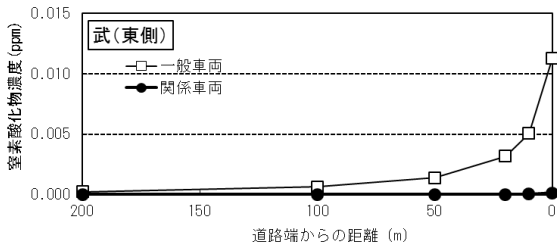
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

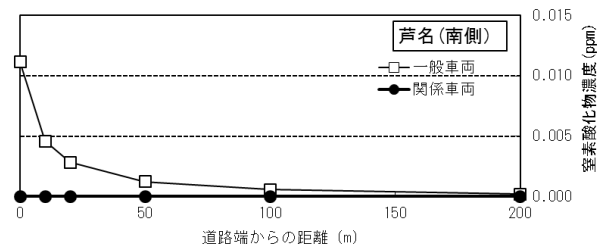
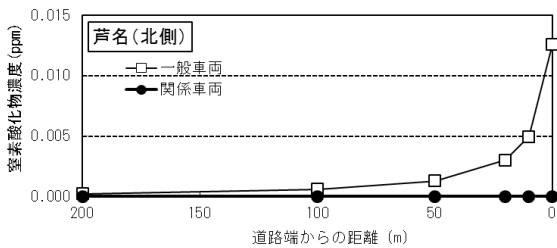
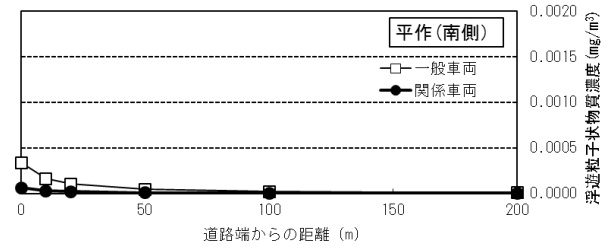
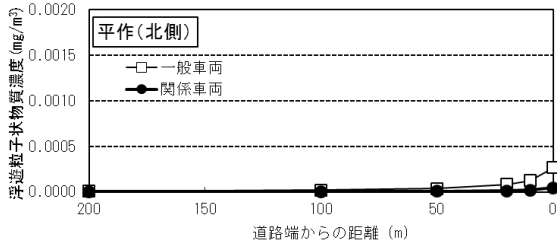
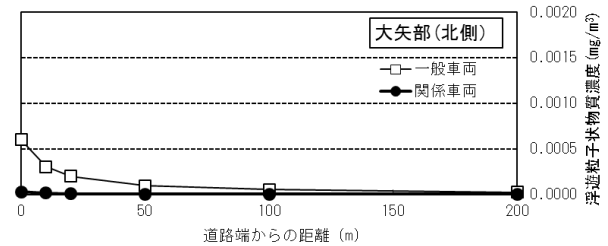
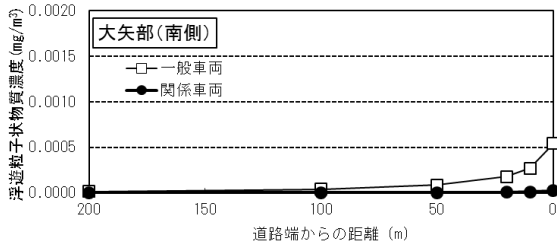


図 5-2-2-1-27 (1/2) 関係車両の走行 (第 2 段階) に伴う窒素酸化物濃度の予測結果 (年平均値)

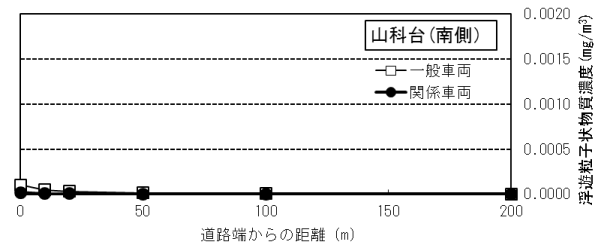
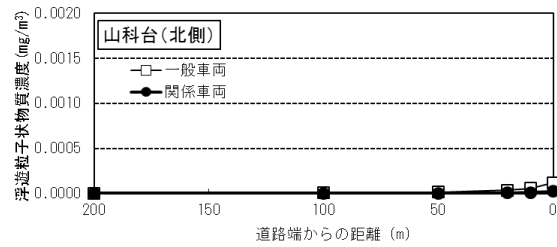
< 平作 >



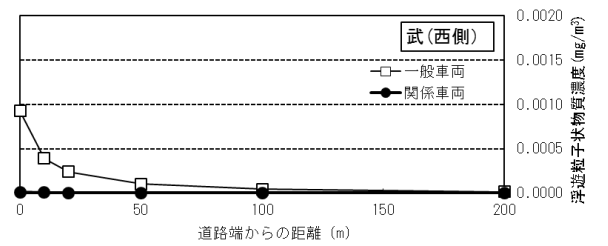
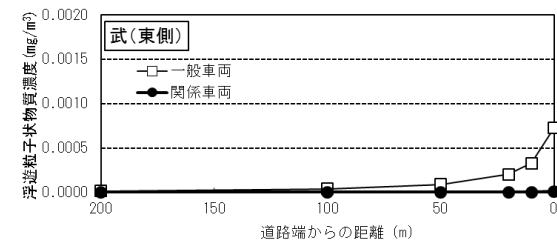
< 大矢部 >



< 山科台 >



< 武 >



< 芦名 >

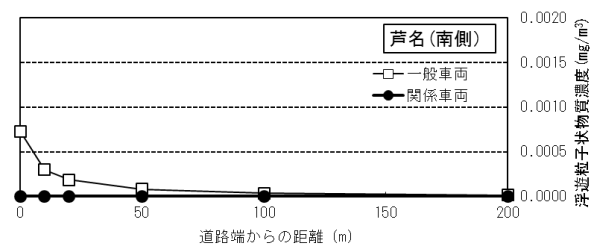
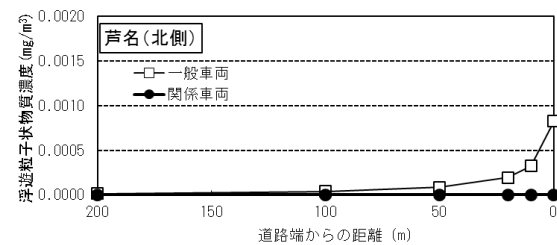


図5-2-2-1-27 (2/2) 関係車両の走行 (第2段階) に伴う浮遊粒子状物質濃度の予測結果 (年平均値)

1.2 評価（廃棄物処理施設の建設）

(1) 評価目標

粉じんの評価目標は、対象事業の実施に伴う粉じんの発生及び飛散が実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼさないこととした。

二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質、塩化水素及びダイオキシン類濃度の評価目標は、表5-2-2-1-51に示す環境基準等、また、実施区域周辺の二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質、塩化水素及びダイオキシン類濃度を踏まえ、実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼさないこととした。

二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質については、予測結果が年平均値であるため、環境基準の日平均値と比較するために、年平均値と日平均値（二酸化硫黄、浮遊粒子状物質：2%除外値、二酸化窒素：年間98%値）との相関関係に基づき、環境濃度予測結果を日平均値に換算して評価を行った。

日平均値への換算式は、平成19～23年度の神奈川県内全域に設置された一般環境大気測定局（一般地域）及び自動車排出ガス測定局（沿道地域）の測定結果を用いて表5-2-2-1-52に示すとおり設定した。

表5-2-2-1-51 大気汚染評価物質の評価の指標

物質	区分	評価の指標	関係法令
二酸化硫黄	1時間値	1時間値の1日平均値が0.04ppm以下であり、かつ、1時間値が0.1ppm以下であること。	「大気の汚染に係る環境基準について」（昭和48年、環境庁告示第25号）
	日平均値		
二酸化窒素	1時間値	短期暴露指針値 0.1～0.2ppm	「二酸化窒素の人の健康に係る判定条件等について」（昭和53年、中央公害対策審議会）
	日平均値	1時間値の1日平均値が0.04ppmから0.06ppmまでのゾーン内又はそれ以下であること。	「二酸化窒素に係る環境基準について」（昭和53年、環境庁告示第38号）
浮遊粒子状物質	1時間値	1時間値の1日平均値が0.10mg/m ³ 以下であり、かつ、1時間値が0.20mg/m ³ 以下であること。	「大気の汚染に係る環境基準について」（昭和48年、環境庁告示第25号）
	日平均値		
塩化水素	1時間値	目標環境濃度 0.02ppm	環境庁大気保全局長通達（昭和52年、環大規第136号）
ダイオキシン類	年平均値	1年平均値が0.6pg-TEQ/m ³ 以下であること。	「ダイオキシン類による大気の汚染、水質の汚濁（水底の底質の汚染を含む。）及び土壌の汚染に係る環境基準」（平成14年、環境省告示第46号）

表5-2-2-1-52 年平均値から日平均値への換算式

予測地点	区分	年平均値から日平均値への換算式
二酸化硫黄	一般地域	(日平均値の2%除外値) = $1.6339 \times (\text{年平均値}) + 0.0009$ (相関係数 : 0.93)
二酸化窒素	一般地域	(日平均値の年間98%値) = $1.4939 \times (\text{年平均値}) + 0.0093$ (相関係数 : 0.79)
	沿道地域	(日平均値の年間98%値) = $1.2212 \times (\text{年平均値}) + 0.0127$ (相関係数 : 0.88)
浮遊粒子状物質	一般地域	(日平均値の2%除外値) = $1.8945 \times (\text{年平均値}) + 0.0101$ (相関係数 : 0.78)
	沿道地域	(日平均値の2%除外値) = $1.6060 \times (\text{年平均値}) + 0.0171$ (相関係数 : 0.58)

(2) 評価結果

ア 搬入道路の新設及び既設道路の改修

ア) 建設工事

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

建設工事に伴う粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事区域の周辺には仮囲いを設置し、掘削、盛土にあたっては、必要に応じ整地、転圧を行う。
- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行う。
- ・ 工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

建設工事に伴う粉じんが発生すると予測されるビューフォート風力階級で風力階級4以上（風速5.5m/s以上）が出現した日数は71日で出現頻度は19.5%、風速5.5m/s以上の年間時間数は399時間で出現頻度は4.6%と低い。さらに、これらの対策を講じることにより、建設工事に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

以上より、建設工事に伴う粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

イ) 建設機械の稼働

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事工程の調整により、工事量の平準化を図る。
- ・ 点検・整備等により、建設機械の性能維持に努める。
- ・ 建設機械の稼働停止時のアイドリングストップを励行する。
- ・ 建設機械は排出ガス対策型を導入し、汚染物質排出の低減に努める。
- ・ 建設機械の通路は裸地のまま放置せず、鉄板を敷くなどして粉じんの発生を抑制する。
- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行う。
- ・ 工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

これらの対策を講じることにより、建設機械の稼働に伴う二酸化窒素の寄与濃度は0.003052ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は0.000184mg/m³となることから、建設機械の稼働に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

また、粉じんについても、これらの対策を講じることにより、建設機械の稼働に伴う降下ばいじん（粉じん）量は0.4～0.7 t/km²/月と小さいことから、建設機械の稼働に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

工事開始後10～21か月目の建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質濃度及び粉じんの評価結果は、表5-2-2-1-53（1/3）～（3/3）に示すとおりである。

二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.030ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.050mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

粉じんの最大着地地点における降下ばいじん（粉じん）量の予測結果は0.4～0.7 t/km²/月となり、参考となる値を下回っている。

表5-2-2-1-53(1/3) 建設機械の稼働に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
実施区域東側敷地境界	0.014	0.030	0.04ppm～0.06ppmのゾーン内またはそれ以下	○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-53(2/3) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
実施区域東側敷地境界	0.021	0.050	0.10mg/m ³ 以下	○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表 5-2-2-1-53(3/3) 建設機械の稼働に伴う粉じんの評価結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん(粉じん)量予測結果				参考となる値	参考となる値との適合状況
	春季	夏季	秋季	冬季		
実施区域東側敷地境界	0.4	0.6	0.6	0.7	10	○

注) 1. 参考となる値とは、国等で整合を図る基準及び目標が定められていない場合、その項目の定量的な評価を行う目安として用いた値である。なお、参考となる値は、「道路環境影響評価の技術手法平成24年度版」(平成25年、国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所)に記述されている。

2. 参考となる値との適合状況は「○:参考となる値を下回る、×:参考となる値を上回る」を示す。

以上より、建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

ウ) 資材運搬車両等の走行

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事工程の調整により、資材運搬車両等が短時間に集中しないよう計画的な時間配分に努める。
- ・ 工事関係者の通勤においては、乗り合い等により、通勤車両台数を低減する。
- ・ 車両が集中する通勤時間帯は、極力工事用資材等の搬出入を行わない。

- ・急発進・急加速の禁止及び車両停止時のアイドリングストップにより、汚染物質排出の低減に努める。
- ・資材運搬車両等の通路は裸地のまま放置せず、鉄板を敷くなどして粉じんの発生を抑制する。
- ・資材運搬車両等の場内の走行に制限速度を設け、粉じんの発生を抑制する。
- ・資材運搬車両等の出入り口にはタイヤ洗浄設備を設け、タイヤ洗浄を行うとともに出入口に清掃人を配置し、適宜、場内道路の清掃を行う。
- ・工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

これらの対策を講じることにより、資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素の寄与濃度は 0.000007～0.000108ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は 0.000001～0.000018mg/m³ と小さいことから、資材運搬車両等の走行に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

また、粉じんについても、これらの対策を講じることにより、資材運搬車両等の走行に伴う降下ばいじん(粉じん)量は 0.1t/km²/月未満～0.1t/km²/月と小さいことから、資材運搬車両等の走行に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

工事開始後10～21か月目における資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質濃度及び粉じんの評価結果は、表5-2-2-1-54(1/3)～(3/3)に示すとおりである。

二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果(日平均値の年間98%値)が0.030～0.036ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果(日平均値の2%除外値)は0.051～0.052mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

粉じんの最大着地地点における降下ばいじん(粉じん)量の予測結果は0.1t/km²/月未満～0.1t/km²/月となり、参考となる値を下回っている。

表5-2-2-1-54(1/3) 資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
平作 南側道路端	0.016	0.032	0.04ppm～ 0.06ppmのゾーン 内またはそれ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.017	0.034		○
山科台 北側道路端	0.014	0.030		○
武 西側道路端	0.019	0.036		○
芦名 北側道路端	0.019	0.036		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-54(2/3) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
平作 南側道路端	0.021	0.051	0.10mg/m ³ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.022	0.052		○
山科台 北側道路端	0.021	0.051		○
武 西側道路端	0.022	0.052		○
芦名 北側道路端	0.022	0.052		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-54(3/3) 資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの評価結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん(粉じん)量予測結果				参考となる値	参考となる値との適合状況
	春季	夏季	秋季	冬季		
平作 南側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1	10	○
大矢部 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1		○
山科台 北側道路端	0.1	<0.1	0.1	0.1		○
武 西側道路端	0.1	0.1	0.1	0.1		○
芦名 北側道路端	0.1	0.1	0.1	0.1		○

注) 1. 参考となる値とは、国等で整合を図る基準及び目標が定められていない場合、その項目の定量的な評価を行う目安として用いた値である。なお、参考となる値は、「道路環境影響評価の技術手法平成24年度版」(平成25年、国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所)に記述されている。

2. 参考となる値との適合状況は「○:参考となる値を下回る、×:参考となる値を上回る」を示す。

3. 「<0.1」は0.1t/km²/月未満であることを示す。

以上より、資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

イ 工事の実施

ア) 建設工事

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

建設工事に伴う粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事区域の周辺には仮囲いを設置し、掘削、盛土にあたっては、必要に応じ整地、転圧を行う。
- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行う。
- ・ 工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

建設工事に伴う粉じんが発生すると予測されるビューフォート風力階級で風力階級 4 以上（風速 5.5m/s 以上）が出現した日数は 71 日で出現頻度は 19.5%、風速 5.5m/s 以上の年間時間数は 399 時間で出現頻度は 4.6%と低い。さらに、これらの対策を講じることにより、建設工事に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

以上より、建設工事に伴う粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

イ) 建設機械の稼働

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事工程の調整により、工事量の平準化を図る。
- ・ 点検・整備等により、建設機械の性能維持に努める。
- ・ 建設機械の稼働停止時のアイドリングストップを励行する。
- ・ 建設機械は排出ガス対策型を導入し、汚染物質排出の低減に努める。
- ・ 建設機械の通路は裸地のまま放置せず、鉄板を敷くなどして粉じんの発生を抑制する。
- ・ 粉じんの発生が予想される作業を行う場合や乾燥時、強風時においては、適宜散水を行う。

- ・工事区域内は適宜清掃を行う。
- ・工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

これらの対策を講じることにより、建設機械の稼働に伴う二酸化窒素の寄与濃度は0.006281ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は0.000468mg/m³となることから、建設機械の稼働に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

また、粉じんについても、これらの対策を講じることにより、建設機械の稼働に伴う降下ばいじん（粉じん）量は0.7～1.2t/km²/月と小さいことから、建設機械の稼働に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

工事開始後29～40か月目の建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質濃度及び粉じんの評価結果は、表5-2-2-1-55（1/3）～（3/3）に示すとおりである。

二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.035ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.051mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

粉じんの最大着地地点における降下ばいじん（粉じん）量の予測結果は0.7～1.2t/km²/月となり、参考となる値を下回っている。

表5-2-2-1-55(1/3) 建設機械の稼働に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
実施区域東側敷地境界	0.017	0.035	0.04ppm～0.06ppmのゾーン内またはそれ以下	○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-55(2/3) 建設機械の稼働に伴う浮遊粒子状物質濃度の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
実施区域東側敷地境界	0.021	0.051	0.10mg/m ³ 以下	○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表 5-2-2-1-55 (3/3) 建設機械の稼働に伴う粉じんの評価結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん（粉じん）量予測結果				参考となる値	参考となる値との適合状況
	春季	夏季	秋季	冬季		
実施区域西側敷地境界	0.7	0.7	1.2	1.2	10	○

注) 1. 参考となる値とは、国等で整合を図る基準及び目標が定められていない場合、その項目の定量的な評価を行う目安として用いた値である。なお、参考となる値は、「道路環境影響評価の技術手法平成 24 年度版」(平成 25 年、国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所)に記述されている。

2. 参考となる値との適合状況は「○:参考となる値を下回る、×:参考となる値を上回る」を示す。

以上より、建設機械の稼働に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

ウ) 資材運搬車両等の走行

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんの影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ 工事工程の調整により、資材運搬車両等が短時間に集中しないよう計画的な時間配分に努める。
- ・ 工事関係者の通勤においては、乗り合い等により、通勤車両台数を低減する。
- ・ 車両が集中する通勤時間帯は、極力工事用資材等の搬出入を行わない。
- ・ 急発進・急加速の禁止及び車両停止時のアイドリングストップにより、汚染物質排出の低減に努める。
- ・ 資材運搬車両等の通路は裸地のまま放置せず、鉄板を敷くなどして粉じんの発生を抑制する。
- ・ 資材運搬車両等の場内の走行に制限速度を設け、粉じんの発生を抑制する。
- ・ 資材運搬車両等の出入り口にはタイヤ洗浄設備を設け、タイヤ洗浄を行うとともに出入口に清掃人を配置し、適宜、場内道路の清掃を行う。
- ・ 工事工程会議等を定期的に行い、上記の保全対策を関係者へ周知徹底する。

これらの対策を講じることにより、資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素の寄与濃度は 0.000001~0.000048ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は 0.000001mg/m³未満~0.000008mg/m³と小さいことから、資材運搬車両等の走行に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

また、粉じんについても、これらの対策を講じることにより、資材運搬車両等の走行に伴う降下ばいじん(粉じん)量は 0~0.01t/km²/月未満と小さいことから、資材運搬車両等の走行に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

平作について工事開始後29～40か月目、大矢部について工事開始後30～41か月目、山科台、武及び芦名について44～55か月目における資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質濃度及び粉じんの評価結果は、表5-2-2-1-56(1/3)～(3/3)に示すとおりである。

二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.030～0.036ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.051～0.052mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

粉じんの最大着地地点における降下ばいじん（粉じん）量の予測結果は0～0.1 t/km²/月未満となり、参考となる値を下回っている。

表5-2-2-1-56(1/3) 資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
平作 南側道路端	0.016	0.032	0.04ppm～ 0.06ppmのゾーン 内またはそれ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.018	0.034		○
山科台 北側道路端	0.014	0.030		○
武 西側道路端	0.019	0.036		○
芦名 北側道路端	0.018	0.035		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-56 (2/3) 資材運搬車両等の走行に伴う浮遊粒子状物質濃度の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
平作 南側道路端	0.021	0.051	0.10mg/m ³ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.022	0.052		○
山科台 北側道路端	0.021	0.051		○
武 西側道路端	0.022	0.052		○
芦名 北側道路端	0.022	0.052		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表 5-2-2-1-56 (3/3) 資材運搬車両等の走行に伴う粉じんの評価結果

(単位：t/km²/月)

予測地点	降下ばいじん(粉じん)量予測結果				参考となる値	参考となる値との適合状況
	春季	夏季	秋季	冬季		
平作 南側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1	10	○
大矢部 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1		○
山科台 北側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1		○
武 西側道路端	<0.1	<0.1	<0.1	<0.1		○
芦名 北側道路端	0	0	0	0		○

注) 1. 参考となる値とは、国等で整合を図る基準及び目標が定められていない場合、その項目の定量的な評価を行う目安として用いた値である。なお、参考となる値は、「道路環境影響評価の技術手法平成24年度版」(平成25年、国土交通省国土技術政策総合研究所・独立行政法人土木研究所)に記述されている。

2. 参考となる値との適合状況は「○:参考となる値を下回る、×:参考となる値を上回る」を示す。

3. 「<0.1」は0.1t/km²/月未満であることを示す。

4. 「0」は粉じんの影響が無視できるものであることを示す。

以上より、資材運搬車両等の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

ウ 土地又は工作物の存在及び供用

ア) 廃棄物処理施設の稼働

a 長期平均濃度

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及びダイオキシン類濃度の影響（長期平均濃度）を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ごみ質の均一化を図り適正負荷による安定した燃焼を維持することで汚染物質の低減に努める。
- ・排ガス処理設備として、集じん装置（バグフィルタ）と活性炭吹込装置、乾式＋湿式併用酸性ガス除去装置、最後段に触媒脱硝装置を設ける。

これらの対策を講じることにより、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄の寄与率は1.5～5.7%、二酸化窒素の寄与率は0.1～0.3%、浮遊粒子状物質の寄与率は0.0～0.2%、ダイオキシン類の寄与率は0.1～0.2%と小さいことから、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及びダイオキシン類濃度の影響（長期平均濃度）の評価結果は、表5-2-2-1-57(1/4)～(4/4)に示すとおりである。

二酸化硫黄の環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.003ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

二酸化窒素の環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.027～0.032ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.046～0.050mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

ダイオキシン類の環境濃度予測結果（年平均値）は0.017～0.027pg-TEQ/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

表5-2-2-1-57(1/4) 煙突排ガスによる二酸化硫黄濃度の評価結果（長期平均濃度）

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
山科台公園	0.001	0.003	0.04ppm以下	○
荻野小学校	0.001	0.003		○
西行政センター	0.001	0.003		○
大楠小学校	0.001	0.003		○
池上市民プラザ	0.001	0.003		○
最大着地濃度地点	0.001	0.003		○

注) 1. 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。
2. 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-57(2/4) 煙突排ガスによる二酸化窒素濃度の評価結果（長期平均濃度）

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
山科台公園	0.012	0.027	0.04ppm～ 0.06ppmの ゾーン内 またはそれ 以下	○
荻野小学校	0.012	0.027		○
西行政センター	0.013	0.029		○
大楠小学校	0.013	0.029		○
池上市民プラザ	0.015	0.032		○
最大着地濃度地点	0.013	0.029		○

注) 1. 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約2,900mの地点である。
2. 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-57(3/4) 煙突排ガスによる浮遊粒子状物質濃度の評価結果（長期平均濃度）

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
山科台公園	0.019	0.046	0.10mg/m ³ 以下	○
荻野小学校	0.019	0.046		○
西行政センター	0.021	0.050		○
大楠小学校	0.020	0.048		○
池上市民プラザ	0.020	0.048		○
最大着地濃度地点	0.020	0.048		○

注) 1. 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。
2. 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-57(4/4) 煙突排ガスによるダイオキシン類濃度の評価結果（長期平均濃度）

(単位：pg-TEQ/m³)

予測地点	環境濃度予測結果	環境基準	環境基準適合状況
	年平均値		
山科台公園	0.017	0.6pg-TEQ/m ³ 以下	○
荻野小学校	0.027		○
西行政センター	0.018		○
大楠小学校	0.018		○
池上市民プラザ	0.019		○
最大着地濃度地点	0.020		○

注) 1. 最大着地濃度地点は、実施区域の南南西側約1,900mの地点である。
2. 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

以上より、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及びダイオキシン類が実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

b 短時間高濃度

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素濃度の影響（短時間高濃度）を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・ ゴミ質の均一化を図り適正負荷による安定した燃焼を維持することで汚染物質の低減に努める。
- ・ 排ガス処理設備として、集じん装置（バグフィルタ）と活性炭吹込装置、乾式＋湿式併用酸性ガス除去装置、最後段に触媒脱硝装置を設ける。

これらの対策を講じることにより、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる1時間値の煙突排ガス寄与濃度は二酸化硫黄が0.000324～0.001362ppm、二酸化窒素が0.000193～0.001084ppm、浮遊粒子状物質が0.000192～0.000851mg/m³、塩化水素が0.000405～0.001702ppmと小さいことから、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素濃度の影響（短時間高濃度）の評価結果は、表5-2-2-1-58(1/4)～(4/4)に示すとおりである。

二酸化硫黄の最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果の最大は0.010ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

二酸化窒素の最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果の最大は0.054ppmとなり、評価指標値を下回っており、大気質の環境保全に関する指標と整合が図られている。

浮遊粒子状物質の最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果の最大は0.106mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

塩化水素の最大着地濃度出現時の環境濃度予測結果の最大は0.003ppmとなり、評価指標値を下回っており、大気質の環境保全に関する指標と整合が図られている。

表5-2-2-1-58(1/4) 煙突排ガスによる二酸化硫黄濃度の評価結果（短時間高濃度）

(単位：ppm)

予測項目	環境濃度予測結果 (最大着地濃度出現時)	環境基準	環境基準 適合状況
大気安定度不安定時	0.009	0.1ppm以下	○
上層逆転時	0.010		○
接地逆転層崩壊時	0.001		○
ダウンウォッシュ時	0.004		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-58(2/4) 煙突排ガスによる二酸化窒素濃度の評価結果（短時間高濃度）

(単位：ppm)

予測項目	環境濃度予測結果 (最大着地濃度出現時)	評価指標	評価指標 適合状況
大気安定度不安定時	0.029	0.1~0.2ppm以下	○
上層逆転時	0.054		○
接地逆転層崩壊時	0.017		○
ダウンウォッシュ時	0.006		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表 5-2-2-1-58 (3/4) 煙突排ガスによる浮遊粒子状物質濃度の評価結果（短時間高濃度）

(単位：mg/m³)

予測項目	環境濃度予測結果 (最大着地濃度出現時)	環境基準	環境基準 適合状況
大気安定度不安定時	0.044	0.20mg/m ³	○
上層逆転時	0.106		○
接地逆転層崩壊時	0.048		○
ダウンウォッシュ時	0.024		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表 5-2-2-1-58 (4/4) 煙突排ガスによる塩化水素濃度の評価結果（短時間高濃度）

(単位：ppm)

予測項目	環境濃度予測結果 (最大着地濃度出現時)	評価指標	評価指標 適合状況
大気安定度不安定時	0.001	0.02ppm以下	○
上層逆転時	0.002		○
接地逆転層崩壊時	0.003		○
ダウンウォッシュ時	0.002		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

以上より、廃棄物処理施設の稼働に伴う煙突排ガスによる二酸化硫黄、二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び塩化水素が実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

イ) 関係車両の走行

○ 環境影響の回避・低減に係る評価

廃棄物処理施設の稼働が定常の状態となる第 1 段階（既設道路の改修完了前）及び第 2 段階（既設道路の改修完了後）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質の影響を低減するため、以下の環境保全対策を講じる。

- ・可燃ごみ収集工程の調整により、可燃ごみ収集車両が短時間に集中しないよう計画的な時間配分に努める。
- ・定常稼働時及び定期点検時の関係者の通勤においては、乗り合い等により通勤車両台数を低減する。
- ・急発進・急加速の禁止及び車両停止時のアイドリングストップにより、汚染物質排出の低減に努める。
- ・可燃ごみ収集車両はCNG車等の低排出ガス車への転換を促進し、汚染物質排出の低減に努める。

これらの対策を講じることにより、第 1 段階（既設道路の改修完了前）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素の寄与濃度は 0～0.000471ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は 0～0.000078mg/m³、第 2 段階（既設道路の改修完了後）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素の寄与濃度は 0.000007～0.000362ppm、浮遊粒子状物質の寄与濃度は 0.000001～0.000060mg/m³と小さいことから、関係車両の走行に伴う環境影響は実行可能な範囲内で低減されている。

○ 環境保全に関する基準等との整合性に係る評価

廃棄物処理施設の稼働が定常の状態となる第 1 段階（既設道路の改修完了前）及び第 2 段階（既設道路の改修完了後）における関係車両の走行に伴う二酸化窒素及び浮遊粒子状物質濃度の評価は、表 5-2-2-1-59(1/4)～(4/4)に示すとおりである。

第1段階の二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.030～0.036ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.051～0.052mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

第2段階の二酸化窒素の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の年間98%値）は0.030～0.036ppmとなり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。浮遊粒子状物質の最大着地濃度地点における環境濃度予測結果（日平均値の2%除外値）は0.051～0.052mg/m³となり、環境基準値を下回っており、大気質の環境保全に関する基準と整合が図られている。

表 5-2-2-1-59 (1/4) 関係車両の走行（第1段階）に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
平作 南側道路端	0.016	0.033	0.04ppm～ 0.06ppmのゾーン 内またはそれ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.018	0.034		○
山科台 北側道路端	0.014	0.030		○
武 西側道路端	0.019	0.036		○
芦名 北側道路端	0.019	0.036		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-59 (2/4) 関係車両の走行（第1段階）に伴う浮遊粒子状物質濃度の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の2%除外値		
平作 南側道路端	0.021	0.051	0.10mg/m ³ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.022	0.052		○
山科台 北側道路端	0.021	0.051		○
武 西側道路端	0.022	0.052		○
芦名 北側道路端	0.022	0.052		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-59 (3/4) 関係車両の走行（第2段階）に伴う二酸化窒素濃度の評価結果

(単位：ppm)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の年間98%値		
平作 南側道路端	0.016	0.033	0.04ppm～ 0.06ppmのゾーン 内またはそれ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.018	0.034		○
山科台 北側道路端	0.015	0.030		○
武 西側道路端	0.019	0.036		○
芦名 北側道路端	0.019	0.036		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

表5-2-2-1-59(4/4) 関係車両の走行（第2段階）に伴う浮遊粒子状物質の評価結果

(単位：mg/m³)

予測地点	環境濃度予測結果		環境基準	環境基準適合状況
	年平均値	日平均値の 2%除外値		
平作 南側道路端	0.021	0.051	0.10mg/m ³ 以下	○
大矢部 北側道路端	0.022	0.052		○
山科台 北側道路端	0.021	0.051		○
武 西側道路端	0.022	0.052		○
芦名 北側道路端	0.022	0.052		○

注) 環境基準適合状況は「○:基準値を下回る、×:基準値を上回る」を示す。

以上より、関係車両の走行に伴う二酸化窒素、浮遊粒子状物質及び粉じんが実施区域周辺の生活環境に著しい影響を及ぼすことはなく、評価目標は達成される。

○同種の廃棄物処理施設の状況

重金属類については、将来も現状と同様の廃棄物収集区分であること、現有焼却施設における煙突排ガス測定結果をみても問題ないことから、評価項目として選定していないが、住民より煙突排ガスの水銀について不安の意見があったため、以下のとおり、水銀について簡易的な予測評価を行った。

本廃棄物処理施設と煙突高度や処理規模が類似している同種の廃棄物処理施設（以下、「同種の施設」とする。）の概要を表 5-2-2-1-60、同種の施設における煙突排ガスの水銀の予測結果を表 5-2-2-1-61 に示す。

表 5-2-2-1-60 には、煙突高度が本廃棄物処理施設と同じ 59m で、処理規模が 150～405 t/日の焼却施設を示す。本廃棄物処理施設の建設予定地は最も近い住宅から 300～400m 程度離れており、1～3 km離れたところに住宅密集地があるが、表 5-2-2-1-61 に記載した同種の施設には、直近に住宅が存在したり、100～500m 程度の距離に住宅密集地があるものもある。

同種の施設における環境影響予測評価では、表 5-2-2-1-61 に示すように煙突排ガスによる水銀の年平均の予測環境濃度は $0.001088\sim 0.0024\mu\text{g}/\text{m}^3$ となっており、いずれの施設についても指針値 ($0.04\mu\text{g}/\text{m}^3$) を下回っている。

また、本予測評価書では、評価項目として選定していないため、大気中の水銀の予測を行っていないが、本廃棄物処理施設における煙突排ガス中のダイオキシン類の最大着地地点濃度は 14 万分の 1 程度まで希釈されている。水銀についても同程度に希釈されると考えると、表 5-2-2-1-62 に示すように水銀の環境濃度予測結果は $0.00305\mu\text{g}/\text{m}^3$ となり、指針値 ($0.04\mu\text{g}/\text{m}^3$) を下回る値となる。

表 5-2-2-1-60 同種の施設の概要

施設名	稼働年	処理規模 (t/日)	煙突高度 (m)	施設の周辺状況
A 市 廃棄物処理施設	平成 19 年	405	59	施設の直近に住宅があり、約 300m 離れて住宅密集地がある。
B 市 廃棄物処理施設	平成 23 年	380	59	約 500m 離れて最寄りの住宅があり、約 2km 離れて住宅密集地がある。
C 市 廃棄物処理施設	平成 28 年 稼働予定	336	59	約 500m 離れて住宅密集地がある。
D 市 廃棄物処理施設	平成 21 年	291	59	約 100m 離れて住宅密集地がある。
E 市 廃棄物処理施設	平成 27 年 稼働予定	197	59	約 300m 離れて最寄りの住宅があり、約 1.5km 離れて住宅密集地がある。
F 市 廃棄物処理施設	平成 19 年	150	59	約 500m 離れて住宅密集地がある。

表 5-2-2-1-61 同種の施設における煙突排ガスによる水銀の予測環境濃度

施設名	煙突からの 排出濃度 (mg/ m ³ _N)	最大着地点濃度 (μg/m ³) A	バックグラウンド 濃度(μg/m ³) B	予測環境濃度 (μg/m ³) A+B	指針値 (μg/m ³)
A市 廃棄物処理施設	0.05	0.000088	0.001	0.001088	0.04 以下 ^注
B市 廃棄物処理施設		0.000317	0.0011	0.0014	
C市 廃棄物処理施設		0.000132	0.0020	0.0021	
D市 廃棄物処理施設		0.000180	0.0020	0.002180	
E市 廃棄物処理施設		0.000703	0.0017	0.0024	
F市 廃棄物処理施設		0.000053	0.0021	0.002153	

注) 環境中の有害大気汚染物質による健康リスクの低減を図るための指針となる数値(平成15年、環境省)

表 5-2-2-1-62 本廃棄物処理施設における水銀の予測結果(年平均値)

施設名	処理 規模 (t/日)	煙突 高度 (m)	煙突からの 排出濃度 (mg/ m ³ _N)	最大着地 地点濃度 (μg/m ³) A	バックグラウ ンド濃度 (μg/m ³) B	予測環境濃度 (μg/m ³) A+B	指針値 (μg/m ³)
横須賀市 新ごみ処理施設	360	59	0.05 ^{注1}	0.00035	0.0027 ^{注2}	0.00305	0.04以下 ^{注3}

注) 1. 東京都23区内の清掃工場における自己規制値。

2. 横須賀市職員厚生会館で測定した平成24年度の水銀の年平均値。

3. 環境中の有害大気汚染物質による健康リスクの低減を図るための指針となる数値(平成15年、環境省)

本廃棄物処理施設の水銀の予測環境濃度は、最大着地点濃度と横須賀市職員厚生会館で測定した平成24年度の年平均値であるバックグラウンド濃度を足したものであるが、環境省が示す水銀の指針値を下回る値となっている。また、同種の施設における水銀の予測結果も環境省の指針値を下回っていることから、本廃棄物処理施設の煙突排ガス中の水銀が問題になることはないと考えられる。

また、水銀以外の重金属類についても、現有焼却施設における煙突排ガス測定結果では検出限界未満であり、最新の設備を導入する本廃棄物処理施設の周辺地域においても問題はないと考えられる。

なお、煙突排ガス中の重金属類については、現有焼却施設と同様に定期的な測定を行い、その結果は公表する。

(空白)